

# 南仏における異端カタリ派について (一)

—異端の発現, その系譜と分派—

## Sur les Cathares dans le Midi de la France. I.

渡 邊 昌 美

(文理学部・史学研究室)

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| I. 異端の発現, その系譜と分派 | III. 受容者の地域的, 社会的構造 |
| II. 教義と戒律 (以下次巻)  | IV. 教団の構成と政治史的展望    |

### はじめに

中世西欧における南フランス、特にラングドック地方は社会的・制度的に独自の特徴を有する一つの後進地域であった。十二世紀初頭この地に蔓延した異端を機とする十字軍の結果、この地方は先進地帯北フランスよりする國王権力の制圧下に編入され、その過程の中で政治的、文化的自律性は消失して行く。<sup>(1)</sup> 本稿はこれら一連の諸事件の内における異端運動の役割を、異端の構造の中に政治史的展望の手がかりを、探らうとした、いはばアルビジョア騒乱史の準備的考察であって、神学的・宗教史的・教会史的な関心から出たものではない。即ちⅢ・Ⅳが本稿の意図する所であり、それまでの行論はその前提たるべき知識の点検と整理に過ぎず、筆者自身にとっては止むを得ざる迂回路である。ただ、近來カタリ派について言及されることが次第に多いにも拘らず、これに関する邦文文献の稀少である現情にあっては、現在到達されてゐる知識の段階と問題の状況を整理することも全く無意味ではあるまいと考へ、冗長を厭はず敢て発表することとした。従つて、ここには筆者の独創的な見解は殆んどないし、またそのやうな探究は意図されてゐない。純粹に教義史上の独創的研究は文献・資料の現情からも殆んど不可能に近いと思はれる。筆者も *Histoire Générale de Languedoc* や *Patrologie Latine* 等の大史料集に収載されてゐるもの、およびその他若干のものは別として、Doat 文書<sup>(2)</sup> に含まれる糾問審理 (Inquisition) の供述書を初め、重要な史料・文献で遂に緝く機会を得ないものがあり、その都度明示する通り諸研究の脚注から、しばしば原引用者の意図とは無関係に再引用せざるを得なかつた。本稿が資料的に弱体であることを付記して責任を明かにして置く。<sup>(3)</sup>

### 〔註〕

- (1) 基本的に後進性を媒介とする南仏社会の特殊性、いはゆる<不完全封建制>については、概略的且つ不完全なスケッチではあるが、拙稿、中世南フランス史研究の覚書 (史学雑誌. 66編 3号. p. 49 sqq); 南欧の封建社会 (歴史教育. 9巻 6号)——なほ、騒乱史の経過を概観したものとしては、A. Luchaire, *Innocent III. Paris, 1905-1908. tome II. La croisade des Albigeois*; P. Belperron, *La croisade contre les Albigeois et l'union du Languedoc à la France. Paris, 1942*; Zoé Oldenbourg, *Le Mars 1244. Le Bûcher de Montségur. Paris, 1959.* 参照。
- (2) ドア文書 (Collection Doat) は、十七世紀コルベールの意に基いて筆写蒐集されたラングドック西部関係手稿史料の大集成であつて、低ラングドック関係の手稿史料集たるパコット文書 (Collection Pacotte) と並称される。この内政治史料は *Histoire Générale de Languedoc* (Privat 版) の史料編に再録されたものも多いが、膨大な糾問廷での供述書は、Koch, *Frauenfrage und Ketzertum im Mittelalter. Berlin, 1962. Quellenanhang. SS. 186-199*; R. W. Emery, *Heresy and Inquisition in Narbonne. New York, 1941. Document. pp. 172-175.*; G. W. Davis, *The Inquisition at Albi. New York, 1948. Text. pp. 121-266*; J. H. Mundy (ed.), *Essays in medieval life and thought. New York, 1955. pp. 6-30.* 等に再録されてゐるものを通じて部分的にうかがひ知ることが出来るものの、多くは審問手続に関するものである。甚だ断片的ではあるが特に教義問題と信者の行動に関する告白は、J. Guiraud, *Histoire de l'inquisition au moyen âge. Paris, 1935-38.* の脚注に実に豊富に引用されてゐる。——尚、ドア文書については、Omout, *La collection Doat à la*

Bibliothèque Nationale. Documents sur les recherches de Doat dans les archives du Sud-Ouest de la France. Bibliothèque de l'École des Chartes, 1916. pp. 241 sqq. 参照.

- (3) 異端カタリ派に関する文献目録としては、近年に編集されたもので、P. de Berne-Lagarde, *Bibliographie du catharisme languedocien*. Toulouse, 1959. 及び René Nelli, *Écritures cathares*. Paris, 1959. の二つを挙げる事が出来る。史料形成史と学説史の最も信頼出来る批判的紹介として、A. Borst, *Die Katharer*. Stuttgart, 1953. SS. 1-58. が常に顧みられねばならぬであらう。

## I

1022年、Toulouse において数名の異端者が焚刑に処された<sup>(4)</sup>。1028年には Aquitaine 公 Guillaume V が Charroux の地方教会々議において異端対策を講ぜしめてゐる所から<sup>(5)</sup>、十一世紀初頭の西南フランスに相当数の異端者が存在したことが察せられる。十一世紀初頭は全西欧的に異端発生<sup>(6)</sup>の報告が集中してゐる一つの劃期であるが、南仏もまたこの大勢から例外ではなかつたのである。かれらはしばしばマニ派として断罪され、時にはイタリアからの伝来が示唆されてゐる場合もある。但し公教会は教説内容とは無関係に、最も危険な異端の意味でマニ派と断定する場合もあるから、これらを十二世紀異端運動の直接の先駆と見るのは性急に過ぎるであらう。

カタリ派の直接の先駆となる、本格的な異端がこの地に展開したのは十二世紀前半期のことである。1119年、教皇 Calixtus が南仏巡幸の途上、Toulouse に開催した地方公会議の決議第三条は、《宗教ノ仮面ヲ被リ、イエス・キリストノ血ト肉ノ秘蹟、オサナ児ノ洗礼、聖職及ビソノ他教会ノ職階、更ニ適法ノ婚姻ヲ呪フ者達ヲ、基督教徒ニ対シテハ教会ヨリ放逐セムコトヲ、世俗ノ權威ニ対シテハ禁圧セムコトヲ》<sup>(7)</sup> 命じてゐるが、この時、中・南仏を横行してゐた異端はアンリ派・ピエール・ド・ブリュイ派 (Henriciens-Petrobrusiens) であった。Henri de Lausanne は、1116年 Le Mans に出現し、次いで Poitiers, Bordeaux と信者を獲得しながら遊行して Dauphiné, Provence に入り、ここで以前から別個に類似の説を弘めてゐた Pierre de Bruys なる者に邂逅してこれに師事し、以後両者提携して宣教に當つた。1126年頃 Pierre は Saint-Gilles に刑死したが、Henri は1148年 Reims 宗教会議に廻付されるまで、Toulouse を拠点として周辺地方、特に Gascogne への伝道に力め問題を作り出した<sup>(8)</sup>。ピエール派對策には特に Cluny 院長 Pierre le Vénéable が関心を払ひ反駁文書<sup>(9)</sup> を著はして Dauphiné, Provence の諸司教に配布してゐるが、これはそのまま同派による汚染範囲を示すものであらう。また彼は、偉大にして高名な都 Toulouse がかかる詐欺漢に誘はれたことを痛歎したと伝へられるから<sup>(10)</sup>、同市にも影響を及ぼしたものであらう。アンリ派に対しては、1147年 St. Bernard de Clairvaux がラングドック地方を巡回して対抗伝道を行つてゐる。Toulouse では市民は異端者との公開討論を彼に要求する有様であつたし、Albi では市民のほとんど全部がアンリの説を信奉するか、或ひは公然と支持してゐて、St. Bernard 一行を排斥の喧騒を以て迎へたが、二日後には彼に動かされて異端誓絶 (abjuratio) を行ひ公教会に復帰した<sup>(11)</sup>。しかし最も深く異端に侵されてゐたのは、小邑 Verfeil であった。St. Bernard が、《会堂ニテ、此ノ地ニ力有ル者ドモニ教ヲ述ベムトセシニ、コノ者ドモ会堂ヲ退去シ、民マタコレニ従フ。至福ナル人、彼ヲ追ウテ広場ニ出デ、神ノ言葉ヲ述ベ始ム。シカルニカノ者ドモ家々ニ入ル。民ノミ其場ニアリテ教ヲ伝フルモノヲ困ミタリ。而シテカノ者ドモ大音ヲ発シツツ馳セメグリテ、民ヲシテカノ人ノ声ヲ聴クヲ得ザラシム…カノ人、コノ町ヲ呪フ》<sup>(12)</sup> 始末で、要するに説教は失敗した。この時、《コノ小城邑ニハ、旌旗ツケタル軍馬ト武器ヲ有スル騎士百家アリ》<sup>(13)</sup>、これらが異端支持を表明してゐたのである。このやうにこの地方における異端の進展は著しいものがあつたのであつて、St. Bernard が巡歴開始直前、Saint-Gilles 伯 Alphonse にあてた書簡で、《会堂ハ民トトモニナク、民ハ牧者トトモニナク、牧者ハフサハシキ敬意トトモニナク、遂ニ基督教徒ハ基督トトモニナシ…カクノ如ク神ニ逆ヒテ行ヒ且ツ語ルコノ者(=アンリ)

ハ神ヨリ来レルニ非ズ。嗚呼、傷マシキ哉。シカモコノ者、数多ノ者ヲシテ耳ヲ傾ケシメ、信ズル民ヲ有ス。》<sup>(14)</sup>とあるのは、決して単なる修辞ではなかった。伝道行の終りに当って、St. Bernard に随行した修道僧 Geoffroi は、《カノ邪悪ハ神ニ撃タレテ近ク終熄セムモノト信ズル。サリナガラ、カクバカリ多クノ誤迷ノ説ニ誘ハレタ国ハ長キ説教ヲ要ス》<sup>(15)</sup>と、誌してゐる。注目すべき点は、異端受容者の中に特に目立つものとして、一方で織工 (textores)、他方に騎士=中小領主 (milites) があることである。騎士が異端を支持するのは特殊南仏的現象であって、これは Verfeil の百騎士の例だけではない。Geoffroi が、《吾ラハ頑迷ナル数多ノ騎士ヲ見出ス。吾ラノ見ル所デハ、(信仰上ノ) 過誤ニヨルヨリモ寧ロ貪婪ト邪慾ニ基ク。スナハチ、コノ者ラハ僧職ヲ憎ミテアンリノ徒ヲ歎ビ迎ヘル。コノ者、カレラニ、カレラノ(私ノ) 戦ヒノ機会ト理由ヲ何処ニ得ベキカラ語ルガ故デアル。》<sup>(16)</sup> Toulouse の織工に関して、Geoffroi は、《実ニ、カノ都ハ異端者ヲ愛スル若干ノ者ドモヲ有シ、織工ラノ或ル者ラ…》<sup>(17)</sup>と報じ、St. Bernard 自身も、《女ハ男ヲ残シ、同ジク男ハ妻ヲ棄テ、カノ者ドモノモトニ集ヒ来ル…カレラノ中ニ数多ノ織工並ビニ織女工アリ》<sup>(18)</sup>と述べてゐる。十二世紀後半期の異端展開の絶頂期における荷担者乃至追隨者の中で、この二種類の社会範疇、特に中小領主層の持つ歴史的意味は極めて重大であり、このことについては後に詳述するであらうが、早くも端緒的段階において、この現象が表はれてゐることを指摘して置く。

教説内容に関して、ピエール派とアンリ派は相互に融合する点があり、大差はない模様である。Toulouse で彼らがアリウス派 (Ariani) と自称した他称されたことが知られてゐるが<sup>(19)</sup>、もとより真正アリウス派であるはずもない。両派の教説の要点は、聖書中旧約を中心とする過半の書卷の棄斥、幼児洗礼の無効、祭壇、会堂の不要、死者代禱の無効<sup>(20)</sup>、誓約拒否<sup>(21)</sup>、婚姻・肉食の禁戒<sup>(22)</sup>、煉獄不在の主張<sup>(23)</sup>、等であって、Toulouse 会議 (1119) で弾劾された異端教説と相通じてゐる。これら諸項目は、後のカタリ派教義体系の中に置いても、殆んど矛盾を来すことはない。また、この頃西欧にカタリ派の教説が流入してゐたことについては、Köln の異端者に関する Everwin von Steinfeld 書簡<sup>(24)</sup> からほぼ確実に知られ得る。従って、アンリ派=ピエール派がカタリ派の影響を受けてゐることは十分考へ得ることである。しかし、他面、これら諸条項は福音主義系統の諸異端もほぼ一様に唱へた所であるし、またこれらが二元論を奉じたことに関する報告がないのであるから、直ちにかれらを以て純粹且つ体系的な教義を備へたカタリ派と断定することは危険である。また Albi の場合が示すやうに、異端受容の様態においても一種独特の浮動性、不安定性が看取され、確固たる教団が組織されてゐたとは到底考へることが出来ない。彼らがカタリ派の影響を受けてゐたとしても、未だ組織的な宣布によるものではなく、少数遊行者の口伝を介しての、おそらく不完全且つ断片的な波及であつたに過ぎないであらう。ただ、異端運動としては、少時後のカタリ派大展開の直接の前段階であつたこと、及びこの時すでに異端受容の条件が成熟してゐたこと、を指摘し得るに留まる<sup>(25)</sup>。

南仏におけるカタリ派<sup>(26)</sup>の組織的浸透の時期は、西欧内他地方の事例から見て、凡そ十二世紀60年代と考へて誤りあるまい。すなはち、この頃、publicani (1160, Oxford), populicani (1162, Flandre), cathari (1163, Köln), deonarii 又は poplicani (1167, Bourgogne) 等のそれぞれ二元論異端に特徴的な呼称<sup>(27)</sup>で知られる異端群の続発があり、中でも Köln のそれについては Ekbart von Schönau の報告<sup>(28)</sup>が詳細を伝えてゐる。南仏もまた西欧全域にわたるカタリ派の展開から、例外ではあり得なかつたであらう。1163年 Tours に教皇 Alexander III が主宰した宗教会議は、特に Toulousain と Gascogne の異端者に対して呪詛を投じてゐる。これと同年には、Pons なる者が Périgord で多数の信者を獲得した事実が報ぜられる<sup>(29)</sup>。更に、1165年五月には、Lombers (Albigois) に宗教会議が開催される。これは先きの Tours 会議の決議に則り、現地ですpecificな対策を講ぜんがためのもので、Narbonne 大司教をはじめとし、同地方の司教四名 (Nîmes,

Lodève, Toulouse, Agde), 僧院長八名とその補佐役達, 俗人としては Constance (王妹, Toulouse 伯夫人), Trencavel (Albi, Béziers, Carcassonne, Razès 副伯), Sicard (Lautrec 副伯) 等が列席してゐる. 他方異端者側もこの会議に殺到し, 本来異端者処罰を目的とした会議は結果的に異端の代表 Olivier なるものとの討論の場と化した. ここで Olivier は信条の細目についての説明を回避したが, 経典として新約のみを承認することを明言し, 且つ福音書の章句を楯に宣誓を拒んだ. また, 自ら《良き人》(bonus homo) と称したが, これはカタリ派の自称に他ならない. 会議はかれらに有罪を宣告し, 列席の世俗領主らもこれに副署し, 更に翌1166年 Narbonne 大司教主宰の Capestang 宗教会議もこれを再確認したのであったが, その判決はつひに執行されることがなかった<sup>(30)</sup>.

1167年, この度は異端者側が Saint-Félix-de-Caraman に自らの宗教会議を開催し, Albigeois, 全 Toulouse 伯領, Val d'Aran, Gascogne, France (=北フランス), Lombardie の諸地方から代表を集め, 決議によって Toulouse 及び Carcassonne の両異端司教区が編成された. 会議を主宰したのは Constantinople から来た Nicetas (又は Niquinta) なる異端指導者であった. この会議は, すでにこの地に拡散してゐるカタリ派の教義上の混乱と逸脱を肅正し統一することを最も重要な目的としてゐたのであり, 事実これ以後南仏カタリ派の間では絶対二元論派(後述)が圧倒的優位を占め, 教義上の動揺を経験することはない<sup>(31)</sup>. 糾問廷における被告人乃至参考人の供述に, 自身の入信や異端横行目撃の時期が集中するのは1205年頃以後のことであるから, 徹底的な異端化は十二世紀極末或ひは十三世紀初頭のことであったとしても<sup>(32)</sup>, この1167年を以て南仏カタリ派の組織と教義の一応の確立の年代と見做すことができるであらう.

〔註〕

- (4) Vaissète et Devic, Histoire Générale de Languedoc. Edition Privat. t. III, p. 259 — 以下本書は HGL. と略記する.
- (5) ibidem—尚 Guillaume の措置は, 西南仏支配者の一部におけるクリュニイ改革, 次いでグレゴリウス改革の受容と支持の在り方に先駆的な形で関係するものである. 一般に, 異端運動は教会側の運動たるグレゴリウス改革と不可分の関係にあるが, この点に関して, E. Magnou, Introduction de la réforme grégorienne à Toulouse. Toulouse, 1958; Griffe, La réforme monastique dans le pays audois. Annales du Midi, t. 75, 1963. p. 457 sqq.; A. Mundo, Moissac, Cluny et les mouvements monastiques de l'Est des Pyrénées du Xe au XIIe siècle. ibidem, p. 551 sqq.; C. Blanc, Les pratiques de piété laïc dans les pays du Bas-Rhône au XIe et XIIe siècle. ibidem, t. 72, 1960. p. 137 sqq. 参照.
- (6) 991年 Reims 大司教に選ばれた Guillaume d'Aurillac は正統信条を告白して, 己れに加へられたマニ派の嫌疑を払った. これは異端発生を伝える材料ではないが, 一般的な異端の存在を想像せしめる. 1015年には Limoge 司教 Gérard がマニ派を追求し, 1022年には Sainte-Croix-d'Orléans 僧院の修道僧若干が《マニ教徒タルコトガ立証サレ》(<probatum esse Manichaei.> Adémar de Chavannes, cit. in: Runciman, Le manichéisme médiéval. L'hérésie dualiste dans le christianisme. trad. fr. Paris, 1949. p. 159), 国王 Robert le Pieux によって焚刑に処された. この時はゆるく世俗の腕( bras séculier)による, 対異端個有の処罰方法としての焚刑が復活されたのであった. 1025年には, Arras 司教区内に Gondolphe なる者に従ふ異端者の群が横行してゐる. 発生は散発的であつて連絡を有したとは考へられないが, 禁圧政策の側には明らかに連携と統一がある. これら十世紀末から十一世紀20年代に及ぶ時期に中世異端運動の一応の上限を見ることが出来る. —無論, 異端の発生それ自体はこの時期に限らない. それは基督教会の成立とともに古いのであるが, 古い時代のそれが多く神学的次元の問題に属したのに対し, 十一, 十二世紀のそれは封建社会内部の変動に関連して広汎な規模の運動として展開した点で特徴を有してゐる. もとより, 中世人の複雑な行動様式乃至生活感情, 就中非合理的契機に満ちた宗教感情を, そのままに理解把握することは不可能であるが, 中世では宗教の人間生活に対する規定性の在り方が, 自明のことながら, 近代とは全く別であることだけは指摘できるであらう. 即ち, 死後の靈魂の行方に関する懸念と希求に深く没された中世

人の心情を通して、宗教はかれらの生活の全体を支配することが出来たのであり、かかる宗教の正当性の唯一の保持者たる公教会は一つの体制の妥当性を保証する、いはば意識の内なる秩序であった。かかる意識と体制の一体化、信仰の制度化の発端は、教会が救済の手段たる秘蹟の効果を排他的に占有したアルル公会議（四世紀）に求め得るであらう。以後、秘蹟は人間の一生の主要な通過点を掌握することによって、意識と行動を秩序に結合する役割を果すことが出来る。後述する如く、カタリ派が婚姻を認めないことを反人倫と非難した公教会は、同時に、同派が容認した同派支持者達の配偶者を情婦（*concubina, amasia*）と呼び乱倫として弾劾した。矛盾するかに見えるが、公教会は自らの秘蹟の外側に生活の進展することを許さうとしない点では一貫して居り、体制としての公教会の在り方がよく窺はれる。されば、異端の発生は秩序と規範の間に亀裂の生じたことを意味し、異端が単に内的な良心の問題として完結することなく、そのまま政治上の動揺に延長展開する可能性は最初から内蔵されてゐる。事実、異端発生に際しては、教会よりもさきに世俗領主が禁止に当るのが普通でありそのため西欧各地の異端は多く初発の内に掃蕩されて体制的な危機に至らなかったのである。実にこの点で南仏は特殊な事例である。異端は、諸種の階層を含む「民衆」の社会的成長に対応する宗教感情の熟成と横溢、主体的な宗教生活への参加の主張が、体制としての教会の枠を逸脱した所に成立する。多様な信条を奉ずる異端諸派は、一応、福音主義系の内発的な一群と、新マニ系のそれとに二大別できるであらうが、上述の如き性格は前者、例へば *valdenses* における俗人説教権・俗人釈義権の主張や、聖書の俗語訳など、*Alphandéry* の古典的規定たる「異端における新しきモラルの要求」(id., *Les idées morales chez les hétérodoxes latins au début du XIIIe siècle*. Paris, 1903. p. XII) に端的に表はれてゐる。この種異端には主観的には公教会敵対の意図を持たぬものが多く、外部の力によって客観的に異端化されて行くのが普通である。公教会も統制可能の場合にはこれらを受容吸収して体制の内部に固定することを厭はない。初めに修道団としての認可を申請した *valdenses* に対して、教皇庁が数年取捨に迷った末、異端として断罪するに至った経緯や、托鉢僧団成立史と不可分に絡合してゐる *beguini*、或ひは *pseudo-apostoli* の主張などは、この間の消息を伝えるものであらう。(これらに関する公教会側の見解を簡潔に示したものとして、éd. Mollat, *Manuel d'Inquisiteur*. Paris, 1921. t. I. p. 84 sqq., p. 108 sqq. 参照)。これに対し新マニ系諸異端の場合には、受容した諸階層の側の客観的諸条件はおそらく同様であり、また教義上にも共通点が少なからず見出されるのではあるが、公教会に対する態度は最初から異なる。それは大前提的に既存の公教会を否定せんとするのである。この点で新マニ系異端が持つてゐる尖鋭な攻撃的性格は、福音主義系異端を十分に説明し得る論理をして、同派理解のためには必ずしも十分たらしめないやうに考へられる。

(7) HGL., t. III, pp. 638—639

(8) *ibidem*, pp. 741—746

(9) *Tractatus adversus Petrobrusianos*. Migne, *Patrologiae*, Ser. Lat., t. 189, col. 719 sqq. — この叢書は以下 MPL. と略記する。

(10) *cit. in*: HGL., t. III, p. 742

(11) *ibidem*, p. 745

(12) <Cumque cepisset in ecclesia sermonem proponere contra eos qui majores erant ibi, ecclesiam exierunt, quos et populus est sequutus. Quos vir beatus sequens in platea cepit proponere verbum Dei, illi autem per domos indique latuerunt, eo tamen plebecule circumstanti nichilominus predicante; sed eis perstreptibus et fores percutientibus ut nec plebs posset percipere vocem ejus... maledixit.> *Guillelmi de Podio Laurenti Cronica*. IIIe *Mélanges d'histoire au moyen âge*. Biblioth. de la Faculté des Lettres de l'Univ. de Paris, XVIII. 1904. p. 120.

(13) <erant in eodem castro centum hospitia militum, equos cum intersignibus et arma habentium...> *ibidem*.

(14) <Basilicae sine plebibus, plebes sine sacerdotibus, sacerdotes sine debita reverentia sunt, et sine Christo denique Christiani... Non est hic homo a Deo, qui sic contrario Deo et facit et loquitur. Proh dolor! auditur tamen a pluribus; et populum qui sibi credat, habet.> S. Bernardi Abbatis Clarae-Vallensis epistola ad Hildefonsum comitem Sancti Aegidii. MPL. t. 182, col. 434.

(15) <Credimus, annuente Domino, malitiam ejus finiendam brevi. Terra tam multiplicibus errorum doctrinis seducta opus haberet longa praedicatione.> Epistola Gaufredi monachi Clarae-Vallensis. MPL., t. 185, col. 412.

- (16) <Milites quidem nonnulli obstinatos, sed non tam errore, ut nobis videtur, quam cupiditate et voluntate mala; oderunt enim clericos et gaudent facietis Henrici et quia is loquitur eis unde occasionem habeant et excusationem militiae sua.> ibidem.
- (17) <Paucos quidem habebat civitas illa qui haeretico faverent: de textoribus... nonnullos.> ibidem, col. 411.
- (18) <Mulieres, relictis viris, et item viri, dimissis uxoris, ad istos se conferunt... apud eos textores et textrices plerumque.> S. Bernardi Cl.-Vall. Sermones in cantica canticorum. MPL., 183, col. 1092.
- (19) 彼等は《自ラアリウス派ト称スル》(<Arianos ipsi nominant> Epistola Gaufredi. MPL., t. 185, col. 411). また、《サレバ、(コノ者ハ)アンリ(Henricus)ト呼バレ、(コノ者ラハ)Arianiト呼バレタ》(ibidem, col. 412). そして St. Bernard は注釈を加へて、《首魁且ツ教祖トシテ、マニ派ハマニヲ、サベリウス派ハサベリウスヲ、アリウス派ハアリウスヲ、エウノミウス派ハエウノミウスヲ、ネストリウス派ハネストリウスヲ有シタ…》(<Manichaei Manem habuere principem et praeceptorem, Sabeliani Sabellium, Ariani Arium, Eunomiani Eunomium, Nestoriani Nestorium...> Bernardi Cl.-Vall. Sermones in cantica canticorum. MPL., col. 1094) としてゐるから、当時の公教側弁駁家は真正アリウス派と理解してゐたのである。しかし、恐らくこれはアンリ派(Henriciani)の転訛形が誤解されたものであらう。
- (20) Guiraud, op. cit., t. I, pp. 4, 5; HGL. t. III, p. 473; Runciman, Le Manich. méd., p. 109
- (21) 《福音書ニ、天ヲ指シテ誓フ勿レ、地ヲ指シテ誓フ勿レトアルヲ理由ニ、突ニ彼ラハ誓ヲ立テムトセズ》(<ne quidem jurare ullatenus acquiescunt, propter illud de Evangelio: Non jurare per caelum neque per terram.> S. Bernardi sermones in cantica, MPL., t. 183, col. 1089)
- (22) 《カレラハ婚姻スルヲ禁ズ。カレラハ神ノ創リ給ヒシ食物ヲ摂ラズ。》(<Hi nubere prohibent, hi a cibis abstinent quos Deus creavit.> ibidem, col. 1094)
- (23) 《死ノ後、煉獄ノ火ニ留マルヲ信ゼズ。肉身ヨリ放タレシ魂ハ、直チニ、平安、又ハ断罪ニ到ル(ト信ズ)》(<Non credunt ignem purgatorium restare post mortem; sed statim animam solutam a corpore, vel ad requiem transire, vel ad damnationem.> ibidem, col. 1100)
- (24) 1143年又は1144年、Everwin は S. Bernard にあてて、《昨今、吾ラノモト、ケレン近傍ニテ、異端ガ露頭》(<Nuper apud nos juxta Coloniam quidem haeretici detecti sunt.>) せる旨を報じた書簡の中で、異端の特徴を列記してゐる。その要項は、アンリ派=ピエール派と大同小異であるが、その内で肉食禁戒に関して、《ソノ食餌ニオイテ、凡ル種類ノ獸乳ヲ…又、何ニテモアレ、交尾ニヨリテ成レルモノヲ拒ム》(<In cibis suis vetant omne genus lactis, ... et quidquid ex coitu procreatur.>) とある、その理由づけは紛れもなくカタリ派特有のものである。Evervini Steinfeldensis Epistola ad S. Bernardum. MPL., t. 182, cols. 677, 678.
- (25) この時期における異端発生——特に広範囲な拡大と定着を別にすれば——は、南仏特有の現象ではない。即ち、1100年から1115年頃までには、低地方からライン沿岸における Tanchelm (又は Tanquelin) の徒の横行、1125年 Soissons における Clementius の出現、1140年ブルターニュにおける Eude l'Etoile の騒動、同年 Liège 司教区における異端鎮圧等が知られてゐる。また1139年イタリアでは、後に Arnaldistes と呼ばれ、教説類似の故に valdenses と合流することになった一派の開祖 Arnaud de Brescia が僧職を解かれてゐる。——この内 Clementius については、農民の出身であつたこと、教説の要点として、① イエスは仮幻 (phantoma) なりとしたこと、② 幼児授洗は未だ理非を弁ぜざるが故に無効としたこと、③ 祭壇の秘蹟を誤りとしたこと、④ 聖職者を攻撃して《司祭ノ口ハ地獄ノ口》と罵倒したこと、⑤ 墓地と田野を区別しなかつたこと、⑥ 婚姻と分娩を罪惡視し、《男タチハ男タチトトモニ、女タチハ女タチトトモニ、臥スヲ慣ヒトシタ》(<viros cum viris, foeminas cum foeminibus cubitare noscunt> Guibert de Nogent, cit in: Guiraud, op. cit., t. I, p. 10) こと、などが伝へられてゐる。そして Guibert de Nogent はこれを真正マニ派に他ならずと注釈した。(<Si relegas haereses ab Augustino digestas, nulli magis Manichaeorum reperies convenire> ibidem). 今一人の異端者 Eude は文盲と伝へられ (<illiteratus et idiota> William of Newbury; Otto von Freisingen. cit. ibidem, t. I, pp. 14, 15), 森林に秘密の集會を催し、追隨者を率ゐて教會を掠奪し、肉食を禁じ、自ら世を裁かむために來つたと号して、Eum 又は Eon と改名したと云ふ。この二件には、これまたもとより断定の限りではないが、残存古マニ派、或ひは伝來新マニ派の何らかの影響を

感じさせるものがある。但し、さうとしても、アンリ派、ピエール派の場合以上に、曖昧、熱狂的な、そしてより変形された、いはば墮落形態における受容であらう。

- (26) 十二世紀後半から西欧に蔓延した、本稿の対象たる二元論異端の呼称について附言する。史料所出の他称は多様を極めるし、また東欧の姉妹異端から区別して何処までを一括すべきかに困難もある。今日もっともよく知られてゐる名は、カタリ派 (cathari) 及びアルビジョア派 (albigensis, albigenses) の二つであるが、本稿では便宜上の術語として、西欧内に展開してゐるものをカタリ派と呼び、東欧をも含めて一連の二元論異端群を指す場合には、新マニ派の名を用ひることとする。アルビジョア派は、稀にはあるが、カタリ派及びこれに混入した valdenses の両者を包括する用例があるから、誤解を懼れ、敢て用ひない。——史料上最も概括的な呼称は新マニ派 (Manichaei moderni temporis) であるが、その概念内容が確定するのは十四世紀初頭のことであり過ぎない。(Bernardi Guidonis Practica officii Inquisitionis heretice pravitatis. Quinta Pars. éd. Mollat, Manuel de l'Inquisiteur. には valdenses, pseudo-apostoli, beguini, judaei と並べて de erroribus manichaeorum moderni temporis なる一章が立てられて居り、吾々のいふカタリ派が専ら扱はれてゐる。第三次ラテラノ公会議 (1179) 決議においてすら、或ル者ガカタリ派、或ル者ガパトリニ派、或ル者達ガブブリカニ派、更ニ他ノ或ル者違ハ別ノ名デ呼ブ所ノ異端者ヲ (<Haeretici quos alii catharos, alii patinos, alii publicanos, alii aliis nominibus vocant...> Mansi, XXII. 231. cit. in: Alphandéry, op. cit., p. XI, n. 1) とあって未だ用語一定せず、公教会側の認識の程度を物語つてゐる。カタリ派の史料出現は、1163年ケルンの異端を報じた Eckbert von Schönau の文中に、コノ者ドモヲ、吾ガドイツニテハカタリ、フランドルニテハピフレス、フランスニテハ、カレラガ織布スル慣行カラテクセラント (=織工) ト呼ブ (<Hos nostra Germania, catharos; Flandria, piphles; Gallia, texerant, ab usu texendi, appellat.> Eckberti Schonaugensis sermones contra Cotharos. MPL., t. 195, col. 13) とあるのが最初である。これとは同年代のブラバント地方に Catti なる語形での出現例がある (P. Bonenfant, Un clerc cathare en Lotharingie. Le Moyen Age, 1963, pp. 270—280)。Runciman は1030年イタリアのモンテフォルテに発生した宗教団が最初にカタリ派と自称したとしてゐるが (op. cit., p. 107), これは吾々のいふカタリ派との同一性に疑点があるから、これを初出例とするのは不適當であらう。cathari とは、いふまでもなく、純粋派乃至清浄派の意である。Borst は、生活の清浄を意味したか、或ひは純粋真正の基督教徒たることを標榜したかは不明としながらも、綱領的性格を持つ自称であると断定してゐる (op. cit., S. 240)。しかし、管見の及ぶ所もとより狭隘ながら、その範圍で筆者は自称としての用例に接したことがない。Niel のいふやうに (Albigensis et cathares. p. 60), 他称であつたと考へたい。——albigenses (albigensis) は、本来、南仏山間の小都市 Albi の固有形容詞である。専ら異端者の別名となつた後、固有形容詞としては新たに albienses が造語された (éd. Guébin et Lyon, Petri Vallium Sarnaii monachi Hystoria Albigensis. t. I, p. 3, n. 3.)。巷間、Albi 乃至その周辺が異端の巢窟であつたが故にこの意味が賦与されたとする語源説話が行はれてゐる。Etienne de Bourbon が、カレラハ albigenses ト呼バレル。Toulouse 並ビニ Agen ノ都ニ相對シ、Albi ノ流レ (=Tarn 河) ニ浴フ、大司教区 (=ナルボンヌ大司教区) ノコノ土地ヲ、大司教区ノ中デ最初ニカレラガ汚シタガ故デアル (<Dicti sunt albigenses, propter hoc, quia illam partem Provinciae, quae est versus Tolosam et Agennensem urbem, circa fluvium Albam, primo in Provincia infecerunt.> cit. in: Runciman, op. cit., p. 169) と誌し、又 Mathiew Paris が、albigenses ト呼バレル異端ノ妖異ハ、ガスコオニユ、アルムプニア (=アキテヌ?オオヴェルニユ?)、アルビジョア及ビトルウズノ國々、マタアラゴンノ王国ニ威ヲ振フノアマリ、モハヤ他國ニオケルガ如ク尙カニデハナク、害悪ヲ行フマデニ至ッタ。カレラハ公然ト自ら謬見ヲ掲ゲ、迂愚ノ者、病弱ノ者ヲ己レノモトニ集メタ。サテ、コノ謬説ノ始レリト云ハルルアルビノ町ニヨリ、カレラハ albigenses ト呼バレタ (<Haeticorum pravitas qui albigenses appellantur, in Wasconia, Arumpnia, et Albigesio, in partibus Tolosanis et Aragonum regno adeo invaluit, ut jam non in occulto, sicut alibi, nequitiam suam exercerent: sed errorem suum simplices attraherent et infirmos. Dicuntur autem albigenses ab Albia civitate, ubi error ille dicitur sumpsisse exordium.> cit. in: HGL., VII, p. 35) と記してゐるから、遅くとも十三世紀半までには、albigenses 即 cathari の語義とその語源説話は一応確立してゐたと見られる。今日、啓蒙書 (例へば L. Cristiani, Brève histoire des hérésies. Paris, 1956. 邦訳、昭和34年、100頁) のみならず、錚々たる専門家の中にもこの説を踏襲してゐる例が散見される (例へば、Runciman, op. cit., p. 169; Borst, Die Katharer, SS. 248, 249)。しかし十二

世紀公教会側の諸文書、例へば Pierre le Vénérable, St. Bernard de Clairvaux, Alain de Lille 等の作品には異端名称としての *albigenses* の用例も、同地を異端発源地とする指摘もない。単に公教会側の認識のみに留まらず、同地が特別に深く或ひは早く異端化されたと信ずるに足る根拠は、初期においても、十字軍の経過の中にも、また糾問期の記録にも見出し得ないのであって、寧ろ異端と騒乱の主たる舞台は、Toulouse, Carcassonne, Béziers の各司教区であった。Albi はこれら諸事件の中で傷つくこと少なく、剩へ十字軍側に大きな兵力を提供してさへある。語源説話を支へるだけの事実は全くないのである。この用例の史料初出は、Niel によれば、1181年 Geoffroy de Vigeois の年代記とされる (*Albig. et cath.*, p. 59) が、用語として確立してゐるか否かは定かでない。一般に十二世紀には未だこの用法は成立してゐなかつたと見得るのではないであらうか。これに対し、十三世紀、十字軍以後の作品では事情が変る。Pierre de Vaux-Cernay の *Hystoria Albigensis* 巻頭に付された教皇インノケンティウス三世への献辞には、*「コノ書ヲ読マン人々ハ、コノ劣作ノ多クノ箇所デ、tolosani 及ビソノ他ノ都府城邑ノ異端者ヲ並ビソノ庇護者ガ、総ジテ albigenses ト呼バレテキルコトヲ知ルベキデアル。コレ即チ、他国ノ者達 (=十字軍士) ガ大司教区 (=ナルボンヌ大司教区) ノ異端者ヲ albigenses ト呼ビ慣ハセルニヨル。」* (*«Autem sciunt qui lecturi sunt librum, quod in pluribus hujus operis locis Tolosani et aliarum civitatum et castrorum heretici et defensores eorum generaliter albigenses vocantur, eo quod alie nationes hereticos Provinciales albigenses consueverint appellare.»* tome I, pp. 3, 4.) とあって、この名辞が十字軍の過程の中で、十字軍士によって与へられたことを示唆してゐる。他地域史料におけるこの語の出現状況から、その成立年代を十字軍開始の年たる1208年と見たものに、Vaissète と Devic の考証がある (*HGL.*, t. VIII, Note originale 13)。即ち、Robert de St-Marien d'Auxerre 年代記は、1201, 1206, 1207, 各年の条では南仏異端を *bulgarorum haeresis* としてゐるに対し、1208年の条では教皇使節 Pierre de Castelnau 殺害事件や十字軍発進に関する記事に数回 *albigenses* の名を用ひてゐる。また1207年の条で*«トゥルウズ伯及ビ隣接諸君候ノ地ニ bulgarorum haeresis ガカヲ有ス»* と記した Guillaume de Nangis 年代記も、翌1208年の条には*«大司教 Guillelmus Bituricensis ハ albigenses ニ向フ軍ヲ調ヘ…»* としてゐることが彼らの用ひた例証である。しからば、何故に *albigenses* が異端者の意を有するに至つたのであるか。Niel は十二世紀初頭、Albi で異端者が処刑された事件、或いは1176年同市近傍の Lombers で行はれた異端者対策会議の印象が各地に伝へられた結果であらうと想像してをり (*op. cit.*, p. 60)。Vaissète と Devic はこれとは全く別に、古来 *albigenses* は *tolosani*, *provinciales* などとともに、広く南仏人の意味で用ひられてゐたのであって、それは容易に南仏異端の意に転じ得たのであると説明してゐる (その例証六件は *HGL.*, *ibidem*)。古い時代になされ、今では殆んど忘れられた考証ではあるが、未だこれを破るだけの推論はなく、この説に随ひたい。

- (27) *Publicani* 及びその変異形は、西歐ではカタリ派の一異称である。語源的にはカタリ派の源流たる小バオロ派 (後述) の転訛であると解釈されてゐる (*Runciman*, *op. cit.*, pp. 168-170; p. 190, n. 28; *Borst*, *op. cit.*, SS. 240-253)。第一回十字軍は小アジアから聖地に向ふ途上度々 *«publicani»* と遭遇してゐる (*Gesta Francorum et aliorum Hierosolimitanorum*, ed. R. Hill, London, pp. 20, 26, 49, 83)。これが真正小バオロ派であるとすれば、上記の推測はほぼ間違ひないであらう。——更に70年代に入れば、今一つの異称たる *bulgari* とその変異形が登場する。
- (28) *Eckberti Schonaugensis Sermones contra Catharos*. *MPL.*, t. 195, cols. 11-102.
- (29) *HGL.*, t. VI, p. 3 は同時代の史料を引用していふ: *«コレラ偽予言者輩ハ、使徒的生活ヲ送り使徒ニ倣フト僭稱スル。カレラハ休ムコトナク教ヲ説キ、裸足ニテ歩ミ、日ニ七度、夜ニ七度、跪キテ祈ル。何人ヨリモ金錢ヲ受ケズ、肉ヲ食ハズ、酒ヲ吞マズ、唯食餌ヲ受クルヲ以テ満足スル。何人モ何物ヲモ私有スベカラザルガ故ニ、喜捨ハ何物ニモ値ヒセズト云フ。聖体ニアヅカルコトヲ拒ンデ、ミサハ無効トトナフ。信仰ノ故ニ死シ、苦シミヲ受クル用意アリト高言シ、奇蹟ヲナス者ノ如クニ振舞フ。主立チタル者、ソノ数ニオイテ十二。首魁タル者、ソノ名ニオイテボンス。」*
- (30) *HGL.*, VI, pp. 3-5. なほ、開催地が Lombers (*Albigensis*) であつて、Lombes (*Touloisain*) でないこと、及び1165年であつて1176年でないことの考証について、t. VII, Note 1.
- (31) *Runciman*, *op. cit.*, pp. 112, 113; *Obolensky*, *The Bogomils. A study in the Balkan Neo-Manichaeism*. Cambridge, 1948; *Borst*, *op. cit.*, SS. 97, 205.
- (32) *Guiraud*, *op. cit.*, t. I, p. 261 sqq. の諸脚注参照。一例だけ再引用すれば、Guillaume de Lagrasse なる者の1245年の証言に、40年以前のこととして、*«Montmaur, Mirpoix, Laurac 及ビソノ他多クノ地ニテ、異端者ヲハ他ノ (=普通一般ノ) 者ノ如クニ公然ト立チ且ツ説クヲ見タ。又ソノ地*

ノ殆ソドスベテノ者達ガカレラノ説教ヲ聞キ且ツ拜スルタメニ參集シタ》(〈Apud Montemaurum et Mirapiscem et apud Lauracum et multis aliis locis terrae, vidit hereticos publice stantes sicut ceteri homines et predicantes et fere omnes de terra conveniebant audire predicationem eorum et adorare eos.〉 Bibl. Munic. de Toulouse, Ms. lat. 609 cit. ibidem p. 262, n. 2)  
この種の証言例は極めて豊富に引用されてゐるので、偶発例とは考へられない。

カタリ派異端が東方より伝来したものであることは、今日では殆んど自明のこととされて居り、教義上の相違や発現年代の矛盾を理由に、それが東欧二元論とは独立に、それと並行して形成されたとする古典的な Schmidt の規定<sup>(33)</sup>は、その後には到達された知識の段階によって基礎を失ひ、起源をバルカン半島の異端ボゴミリ派 (bogomili) に求めるのが通説となつてゐる。無論、西欧内部に残存してゐた古マニ派の伝統が関係してゐないとは断言出来ないし、また東方伝来と言っても、ボゴミリ派がそのまま延長されたわけではなく<sup>(34)</sup>西欧の独自性が形成されてゐるのであるが、《コノ異端説ハ、殉教者たちノ代ヨリ今ニ至ルマデ、蔽ヒカクサレ、ギリシアソノ他ノ国々ニ留マレルコトヲ、彼等ハ自ラヲ弁護シテ吾ラニ語ツタ》<sup>(35)</sup>と伝へられるように、カタリ派自身東方よりの継受の記憶をもつてゐることや、bulgari 乃至 publicani の別称が示唆してゐることなどに留まらず、少くとも十二世紀半以後においては、南仏カタリ派はイタリア・カタリ派とともに広く地中海北岸に展開した異端世界の一環をなして居り、東欧から指導や経典が導入された事実が知られて居るのである。前述 Nicetas について糾問官 Konrad von Marburg が、1223年に、《コノ者ヲ、異端 albigenses 達ハ、ブルガリア人、クロアチア、ダルマチア、並ビニハンガリア人ノ境域ニ住ム、己レラノ教皇ト呼ブ》<sup>(36)</sup>と誌してゐる。1167年 Nicetas は南仏に来るに先立ってイタリアのカタリ派を訪れ、その指導者 Marcus なる者の思想を点検して居り<sup>(37)</sup>、彼の西欧出現は決して偶然的なものではなく、伝道または巡察であつたと見るべきであらう。また彼とは些か思想系譜を異にするが経典として南仏で読まれた〈偽福音書〉(Interrogatio Johannis, 別名 Cène Secrète) の Carcassonne 写本には、《コレハブルガリアヨリ、ソノ司教 Nazarius ニヨリ伝ヘラレタル、Concorrezzo ノ異端者ラノ、誤謬ニ満チタ奥義書デアル》<sup>(38)</sup>といふ註記が書込まれて居て、Bulgaria からイタリアを介して南仏に移入されたことを示してゐる。この Nazarius については、Rainerius Sacconi が曾てこれと面接したことを報告して、《曾テノ、(異端者ノ)司教デアリ最長老タル Nazarius ハ、私ニ対ヒ、又數多ノ他ノ者達ニ対ヒ、聖福ノ処女ハ天使デアッタコト、及び基督ハ人ノ魂 (anima) ヲ有セス、天使ノ魂スナハチ天界ノ体軀 (corpus celeste) ヲ帯ビタコトヲ説イタ。彼ハコノ謬説ヲブルガリア教会ノ司教並ビニ副司教 (filius major) トカラ学ビ得タト語ツタ》<sup>(39)</sup>と云つてゐる。同書は今日ではラテン訳写本によつてのみ伝へられてゐるが、散佚せる原本は十二世紀ブルガリアで成立したスラヴ語の作品であると推定され、内容からも正しくその地のボゴミリ派の特徴を代表するものとされてゐる<sup>(40)</sup>。

かくてカタリ派の直接の系譜はバルカン半島のボゴミリ派にたどり得るのであるが、同派の成立は Cosmas によつて《ツァー・ペトロス (927-969) ノ代、ブルガリアノ地ニ Bogomil ナル名ノ、サレド事ハ、神ノ愛ツル所ニ非ザリシ pop (=説教者) ノ出現スルコトガアッタ》と報ぜられて居ることを根拠に十世紀第2四半期と推定されてゐる<sup>(41)</sup>。かれらは二元論の教義、禁慾主義の戒律、及び恐らくその教団構造において、カタリ派と基本的に同一であつた。

ボゴミリ派もまた、更にその思想的系譜を八世紀後半以降小アジアからアルメニアにかけて拡大した異端小パオロ派 (publicani, paulikios, paulicians) に遡らせ得る。同派に関する最大の史料は、869年、皇帝 Basileus によつてかれらと交渉するために Tephrike 派遣され、その地に滞留した Peter of Sicily が帰国後纏めた報告書 Historia Manichaeorum で (完成は 872 ca.), それには、Samosata (Syria, Mesopotamia, Cappadocia の境界, Euphrates 河畔) に来住した

マニ教徒の兄弟パオロとヨハネが流布したといふ起源説話が述べられてゐる<sup>(42)</sup>。しかし恐らく真の開祖は、Peter of Sicily が七世紀半 Manah に生れた中興の祖として記述してゐる Constantinus-Silvanus であったであらう<sup>(43)</sup>。かれらの二元論がボゴミリ派のそれとやや異なる単純明快な、いはゆる絶対二元論であったこと、殺生戒をも含めて厳格な禁慾主義に関する報告が皆無であること<sup>(44)</sup>、が彼らの特徴である。かれらは九世紀に最盛期を迎へ、十一世紀初頭になほバルカン半島からシリアにかけて散在してゐた。

小パオロ派の教義の基本たる二元論がマニ派の遺産たることは明白である。Peter of Sicily の報告はその起源説話の中で単純なマニ教からの延長を示唆し、また《Constantinus-Silvanus 改革》の後にも単に正統基督教の外被を纏ったのみで實質は純然たるマニ教であるとしてゐる。一般に中世公教側の報告者たちは＜マニ派＞なる語の用法において必ずしも厳密ではなかつたから、真正マニ派と小パオロ派の系譜関係についても検討は当然に要請される。この面での研究は、Obolensky に聴くべきものが多い。彼によれば、真正マニ派の教義体系の中で最も重要な一環であった宇宙論、なかんづく aeon に関する部分は、禁慾的戒律とともに、小パオロ派の中には見出されないし、宗教活動としてマニ派からの直接的連続の関係を具体的歴史的に追跡し得る史料は皆無であつて、思想上の類似性および諸宗教思想の淵藪であつた近東の状況から、マニ派の影響を推定し得るに留まる<sup>(45)</sup>。他面、同じく推測の域を出ないのではあるが、かなりの程度における Marcionism、及び Massalianism<sup>(46)</sup> の影響が考へられる。また、小パオロ派における重要な現象は使徒パオロの福音主義への熱烈な傾倒にみられるやうな、正統基督教への接近である。解釈は二元論に適合させて極端な象徴主義（マリアを天界の意と解するが如き）によつたとはいへ、經典として採用したのは正統教会のそれと全く同一の本文による新約の諸書であつた。かくて Obolensky は、マニ派と小パオロ派との間に或る程度の間隙、寧ろここでの二元論の基督教内的異端としての再形成、そして小パオロ派からボゴミリ派を経てカタリ派に至る系譜関係を結論し、從來不用意に用ひられて来た中世マニ派乃至新マニ派なる語に明確な概念内容を与へ、その適用範囲を限定したのである<sup>(47)</sup>。他方、Jean Guiraud は南仏カタリ派の諸典礼、特に入信式たる *consolamentum* の唱文や要式行為の精密な分析を行ひ、カタリ派典礼は、その形式的側面において原始基督教のそれに酷似してゐる所から、原始基督教の典礼が化石化されて保存伝承されたと推論してゐる<sup>(48)</sup>。その経路については何の史料的手がかりもないが、近東における小パオロ派成立の際に導入されたと考へるのが最も自然であらう。なほ系譜問題と直接の関係はないが、新マニ系諸派が、教説の客観的な在り方とは別に、又かれらが無条件に正統教会に挑戦したこととも無関係に、主観的にはあくまでも真正基督教徒として自任したことは、記憶されてよい<sup>(49)</sup>。

ところで、このような具体的段階的な追跡とは全く別の方法に拠つて、真正マニ派とボゴミリ派、カタリ派を一括して単一の宗教と見做すのは、Déodat Roché である。彼が論拠とするのは、*Interrogatio Johannis*, *Ascensio Isaiae*<sup>(50)</sup>, *Barlaam et Josaphat*<sup>(51)</sup> 等カタリ派が用ひた教義文書の殆んどすべてが古マニ教の文献から出てゐることが近東における発掘文書を媒介として立証出来るといふ文献学的な仮説である。彼によるマニ教の展開と存続の全景は次のように要約出来る。すなはち、古マニ派はその本来の形態と名称のもとでトルキスタンその他に存続した。小パオロ派はこの残存マニ派中の墮落せる一分枝に他ならない。八世紀頃からかれらの間に、広く世界的規模において一連の改革乃至復古運動が発生する。即ちペルシヤ北東部における *denavars* の成立を嚆矢として、カウカサス東部に拡大した *miklasites*、イスラム教徒の間に居た *zandics*、そして最後に十世紀の小パオロ派改革、すなはちボゴミリ派への転化と、そのカタリ派への延長が生じたといふ<sup>(52)</sup>。古マニ派文書或ひはそこから派生した文献がカタリ派によつて読まれ、且つ教説形成乃至補強の具として影響を有したことはほぼ確実であるし、また中世史料に表はれる甚だ不整合な、時には矛盾するカタリ教説の断片的な告白も古マニ教体系を導入すれば一応論理的な構成が可能とな

る場合があることも事実である。しかし、他方 Dondaine<sup>(53)</sup> や Nelli<sup>(54)</sup> 等によって教義上カタリ派と古マニ派との間には深刻な相違が横たはってゐることが指摘されてゐるし、また、古マニ派起源の文献が伝承されてゐることだけでは、特に比喩的象徴的な、いはば恣意的な解釈を福音書に加へたことで知られる新マニ派が、専らこの種文献に依拠した、或いは時代を越えて同一信条を保持したことを証するに足りないと考えられる。更に、系譜問題一般について、一定不変の信仰乃至思想が伝播されて行く過程ではなく、個々の時期と地域における個有の諸条件に規定された宗教運動乃至異端運動を問題にしようとする限り、Roché の如き方法与結論はさして生産的ではないと考えられる。彼の研究は、カタリ派が古マニ派から或る程度の遺産を継承した事実を証するといふ限界内において利用さるべきであらう。

## 註

- (33) Schmidt, *Histoire et doctrine de la secte des cathares et des albigeois*. Paris, 1849. t. II, pp. 263-266. cit. in. Obolensky, op. cit., p. 286
- (34) 西欧内に残伝する古マニ派が東欧より進入する新マニ派と接合してカタリ派を形成したとするのは Niel である (*Cathares et albigeois*, pp. 33, 34, 46, 47) 仮りにその通りであるとしても、東欧からの圧倒的な影響力を考へれば、在来の伝統は殆んど無意味に近い。
- (35) <...dixerunt nobis in defensione sua, hanc haeresim usque ad haec tempora occultatam fuisse a temporibus martyrum, et permanisse in Graecia, et quibusdam aliis terris.> Evervini Steinfeldensis epistola. MPL., t. 182, col. 679
- (36) <...quem haeretici albigenses Papam suum vocant, habitantem in finibus Bulgarorum, Croatiae, et Dalmatiae juxta Hungarorum.> cit. in: Obolensky, p. 240
- (37) Obolensky, op. cit., p. 288; Borst, op. cit., S. 96 sqq.
- (38) <Hoc est secretum haeticorum de Concorrezio portatum de Bulgaria Nazario suo episcopo, plenum erroribus.> ibidem, p. 242
- (39) <Nazarius vero quondam episcopus et antiquissimus coram me et multis aliis dixit, quod B. Virgo fuit angelus et quod Christus non assumpsit animam humanam, sed angelicam, sive corpus coeleste. Et dixit quod habuit hunc errorem ab episcopo et filio majore Ecclesiae Bulgariae >R. Sacconi, *Summa de catharis et leonistis*. cit. in: Obolensky, p. 242
- (40) ボゴミリ派文書の研究を行った Ivanov は、いはゆる Bogomil Books の群を、(一) 性格において明瞭にボゴミリの的でありかれらの奉じた教義を記載してゐるもので經典的性格を有するもの、(二) 一般に基督教的起源を有する黙示録的作品でボゴミリの諸觀念に適合するやうに修正乃至再解釈されたもの、の二群に分類し、前者に *Interrogatio Johannis*, *The Sea of Tiberius* を、後者には *Visio Isaiae*, *Enoch 書*, *Baruch 黙示録*, *Elucidarium*, *The Story of Adam and Eva*, *Gospel of St. Thomas* を入れてゐる。また、Puech はこれら諸作品の大部分は非ボゴミリ起源であるか、又はより後代の民間開闢説話との混合の所産であるが *Interrogatio Johannis* のみは真正ボゴミリ的作品としてゐる。(cf. Obolensky, op. cit., p. 154, n. 2; pp. 226, 242, 243) — 他方 D. Roché は gnosis 起源の文書でマニが注解を加へ広く東西に流布した《十二使徒福音書》から《使徒の覚書》が派生しマニ教徒の間に読まれたが、その一部分が分離して *Interrogatio Johannis* となった。そしてその伝承の起源においてこの一連の文献は *Enoch 書* と関連を有するとして、これを専らボゴミリの文書とする説に反対する (D. Roché, *Etudes manichéennes et cathares*. pp. 227, 228). — このように、文献学的研究は必ずしも一致してゐないが、いづれにせよ最終的原本の成立が Bulgaria のボゴミリ派のもとで、早くとも十一世紀、遅ければ十二世紀中葉に実現したことは異論はなく、東欧とカタリ派との関係を示す点では変りはない。 — 同書は最後の晩餐の席上イエスとヨハネが交した問答を通じて宇宙論・創造説話を展開した書物で、その基本思想は後述する穂和派二元論に立つものである。一部分ではあるが、仏語訳が D. Roché, op. cit., p. 174 sqq. *Textes man. et cath.* 収載されてゐる。
- (41) Obolensky, op. cit., pp. 117-119. なお Bogomil は教祖の名である。ボゴミリ派 (bogomili, bogomiloi) なる異端集団の呼称が出現するのは十一世紀中葉 Euthymius の作品が最初とされる。
- (42) cit. in: Obolensky., p. 32, Runciman, p. 37 — この始祖の一人パオロの名から宗派名が生じたとする Peter of Sicily の所伝は説話の域を出ない。原語における Paulikios は卑小辞を含んでゐる

- て、軽蔑すべきパオロの信者又はパオロの軽蔑すべき信者の意であるから、この呼称は恐らくその敵から与へられたものであると Runciman は推定してゐる。またパオロとヨハネ派 (Paulio-annians) の輕訛と見るのは余りに技術的である。かくて問題は、そのパオロがどのパオロであるかに帰するが、彼は、Samosata のパオロとするには積極的な根拠が欠け、Antiochia の司教パオロとするのは年代的に適合しないとして、彼らが特に新約の中でパオロ書簡を重視し、指導者達が好んでパオロの弟子達の名を己れの法号としてゐることなど、かれらの使徒パオロに対する尊崇著しいものがあるので、そのパオロは他ならぬ使徒パオロであつたとしてゐる。(op. cit., pp. 48-50)
- (43) Peter of Sicily によれば、この者は初め Samosata のパオロの追隨者であつたが、基督教徒の間にもより容易に宣教せんがために、マニ教を新約の章句を以て支へんと希むに至り、いはばマニ教に福音主義の外被を纏はしめた。彼以後、小パオロ派は本来のマニ派と反目するに至つたと述べてゐる。(cit. in: Obolensky, op. cit., p. 32, 33)
- (44) 小パオロ派の教義概要については、Obolensky, op. cit., pp. 38-42; Runciman, op. cit., pp. 51, 52
- (45) Obolensky, op. cit., pp. 21-27
- (46) Marcion 派は周知の通り、初期基督教を取巻く syncretism の中より生じた、自生的原初的な二元論派たるグノーシス派の卓越した神学者、組織者 Marcion の教を奉ずる者達である。Harnack の研究の通り、この派と小パオロ派との間の具体的歴史的な接続は証明されてゐないのであるが、Obolensky は、(一) 小パオロ派の故地アルメニアは四世紀にマルキオン派が勢力を振つた土地であること、(二) (イ) 二元論、(ロ) 仮現論、(ハ) 特に使徒パオロ尊崇、(ニ) 採用經典の一致 (パオロ諸書簡は別として、本来マルキオン派起源であるにも拘らず誤つて使徒パオロに帰せられた Laodiceans への書簡の小パオロ派による採用)、等から影響は十分に推定できるとしてゐる。(op. cit., pp. 45-47) — Massalianism (Messalianism) は四世紀後半メソポタミアに發生し、五世紀シリアから小アジアに展開した宗教運動で、451年エフェソス公会議で断罪される。その存在は九世紀に至るまで確認されてゐる。Massalians とは祈る者の意味で、人間には本来 daemon が棲息してゐて、これは洗礼を以てしても蔽ひ得ず、ただ祈禱のみがこれをなし得ると信じ、絶えず祈れ (テサロニケ前書) とあるを抛り所に人間の唯一のなすべき業は祈禱であると称して跳躍しながら唱文を反復しつつ恍惚状態に陥る祭式を行った。苛酷な禁欲主義の戒律を有し特に生産労働を否定する反面、完成の域に達したものは最早禁戒に拘束されずとして乱倫無頼に耽る場合があつたといふ。土俗的・神秘主義的な性格を有する点、及び極度の禁欲と放漫が奇妙に交錯してゐる点が特徴である。同派の小パオロ派に対する影響はさして強くないが、後にボゴミリ派の成立に際してはかなりの影響を及ぼした (ibidem, p. 49, sqq.)
- (47) Obolensky, op. cit., pp. 8, 25, 27, 58. 彼によれば、二元論は、古マニ派及び新マニ派の、その間に關係はあるもの、しかし独立した、二つの波に分れて西歐を襲つたのである。
- (48) Jean Guiraud, Histoire de l'Inquisition au moyen âge. Paris, 1935-38. t. I, p. 126 sqq.
- (49) カタリ派を異教と見る意見も決して少くない (例へば, Niel, Albigeois, pp. 5, 62). また、基督教内の一教説たることを認めつつも、少くとも西歐にとって異質的であると考へる意見もある (例へば Borst, op. cit., passim). しかし、西歐でカタリ派を展開せしめた所の受容条件は、福音主義系異端を發生せしめた条件と同一であるし、また、主観的に自らを真正且つ正統の基督教徒とする強烈な自覚を持っていた点でも異なる所はない。經典としての福音書への依存、好んで用いた 良き人 (boni homines)、眞の基督教徒 (veri christiani) の呼称、彼ら相互の祝福の辞が常に 吾ラノタメニ主ニ祈リテ、吾ラヲ悪ニキ死ヨリ護リ、ヨキ終末ニ、正シキ基督教徒ノ手ニ導カシメヨ (<Orate Dominum pro nobis quod Deus custodiat a mala morte et perducatur nos ad bonum finem, vel ad manus fidelium christianorum> Bernard Gui, Manuel d'Inq., t. I, p. 20)、或ひは、神、汝ラヲ祝福シ給ハムコトヲ。汝ラヲシテヨキ基督教徒タラシメ、汝ラヲ良キ終末ニ導キ給ハムコトヲ (<Deus vos benedicat, eus fassa bon chrestia, eus port a bona fi.> Doat, 23, 24. cit. in: Guiraud, op. cit., t. I, p. 131, n. 1) であることにも明らかである。また異端者所言として伝へられる 吾ラノ集ヒヲ措キテ、基督ノ眞ノ信仰、基督ノ眞ノ宗教ナシ (<veram fidem Christi, et verum cultum Christi, non alibi esse, nisi in conventiculis.> Eckberti Schon. Sermōnes, MPL., t. 195, col. 13) [なほ、類似の証言は Evervinus Steinf., MPL., t. 182, cols. 677, 678. にも見られる]、或ひは権威の根拠としての使徒承伝の主張たる 基督ヨリ階ヲ追ウテ今ノ代ニ至リ… (<descenderunt a Christo de gradu in gradum...> Liber de supra stella. cit. in: Borst, op. cit., S. 214, Anm. 5)、等もこれを証するであらう。信仰の本質にかかはるこれら多数

の告白を以て、世人を瞞着せんがための狼の粧として片付けるのは余りにも穿ち過ぎる。かくて、思想伝来の系譜問題と宗教の特定社会における在り方の問題は、あくまでも混同さるべきでない。カタリ派は、西欧における限り、異教ではなく、異端である。

- (50) Ascensio Isaiae の原典は散佚して伝はらないが、異なる時期に異なる思想的立場で書かれた細片が纏られたギリシア語の作品であったと推定されてゐる。今日残伝してゐる写本には、①エチオピア語訳本、②ラテン語訳本二種、③古スラヴ語訳本の四種あることが知られてゐる。この内、完本は①のみで他はいづれも断片である。内容は二部に区分出来、第一部は①の I-V に相当する〈本来の Ascensio Isaiae〉で、88~100 A. D. にユダヤ乃至キリスト教徒のもとで編集された。内容は、Ezechias がその子 Manassé によって弑されるであらうといふ Isaie の予言 (I); Manassé の暴政と Isaie の沙漠避難 (II); Balhira が Manassé をして Isaie を追求せしむること、及び Isaie がイエスの生涯と教会の成立を予見すること (III); 世界終末の日の様相を Isaie が予見すること (IV); Isaie の殉教 (V), である。第二部は①の VI-XI 相当部分で、これだけで〈Visio Isaiae〉として独立且つ完全な一書をなし、100~150 A. D. 基督教徒の間で編集されてゐる。内容は、Amos の子予言者 Isaie が、ユダヤ王 Ezechias の時、幻想の中で天界に登ってその構造を具さに知り、且つイエス降臨をあらかじめ目撃したことを記してゐる。これはグノース派を始め様々の宗派が利用して来た所で、中世ではボゴミリ派がそのスラヴ訳を、カタリ派がラテン訳を用ひてゐる。(R. Nelli, *Le phénomène cathare*. Paris, 1964. pp. 103-109) — フランス語への完訳としては E. Tisserand の手になるものがあり (Paris, 1909) (筆者未見)、別に Nelli による第二部のフランス語訳がある (Nelli, *op. cit.*, *Textes et documents*).
- (51) Barlaam et Josaphat は Barlaam の手引きによって Josaphat がまことの信仰に入信する道程を物語る宗教説話で東方の口伝説話の影響が強い。プロヴェンサル訳がカタリ派の間で読まれてゐる。Roché はトゥルファン文書の検討を通じて、六世紀マニ教徒の間で原本が作られたと推定してゐる (Roché, *Etudes manichéennes et cathares*. Toulouse, 1952. p. 30 sqq.).
- (52) Roché, *op. cit.*, *passim*. surtout pp. 45-52; p. 276.
- (53) Dondaine, *Un traité néo-manichéen du XIIIe siècle, Le liber de de duobus principiis*. Roma, 1939. p. 52 sqq. *cit. in*: Roché, *op. cit.*, pp. 34, 44. 彼はカタリ派の場合には *consolamentum* 接受が救済のための不可欠な理由とされ、いはば秘蹟としての性格を有つのに対し、かかる徴候は古マニ教に欠けてゐると見る。そしてこれを宗教の在り方全体にかかはる相違点としてゐる。
- (54) Nelli, *Le phénomène cathare*. p. 37. カタリ派の二元論の根本問題にふれて、悪の原理の本質を非在、虚無と規定したが、これは悪を実体としての靈力乃至永在する物質と解する古マニ教と根本的に相違すると、彼はいふ。

十二世紀後半、南仏に地歩を確立したカタリ派は、単に局地的な宗派ではなく、広く地中海北岸に展開するその姉妹異端の世界の中に編入されてゐた。前述の St. Félix-de-Caraman 異端宗会 (1167) において、異端諸教会相互間の関係の在り方について質問された Nicetas は、«① Romana, ② Drogometia, ③ Melenguia, ④ Bulgaria, ⑤ Dalmatia ノ諸教会ガ区分サレ、劃定サレテキル。一教会ハ他教会ニ対シ、抗争ニ至ルガ如キ何事ヲモナサズ、カクテ相互ニ平和ヲ有スル。サレバ、汝ラモ同ジク為スベキデアル。»<sup>(55)</sup> と一つの原則を答へてゐる。更に、十三世紀中葉の情況については、Rainerius Sacconi の甚だ有名な報告があつて、«カタリ派諸教会 (ecclesiae) ノ数ハ幾何デアルカ。凡テデカタリ派ノ十六教会ガ存スル。ソレヲ教會ト名付ケタコトヲ、読者ハ、予ニデハナク、カレラ (=異端者) 自身ニ歸スベキデアル。カレラ自ラカク呼ブガ故デアル。スナハチ、① Ecclesia Albanensium vel de Donnezacho, ② E. de Concorrezo, ③ E. Bajolensium sive de Bajolo, ④ E. Vincentina sive de Marcha, ⑤ E. Florentina, ⑥ E. de Valle Spoletana, ⑦ E. Franciae, ⑧ E. Tolosana, ⑨ E. Carcassonensis, ⑩ E. Albigensia, ⑪ E. Sclavoniae, ⑫ E. Latinorum de Constantinopoli, ⑬ E. Graecorum ibidem, ⑭ E. Philadelpiae in Romania (Philadelpiae Romaniolae), ⑮ E. Burgaliae (Bulgariae), ⑯ E. Dugunthiae (Dugranciae). 而シテ、スベテ (ノ教会) ハ末尾ノニツ (ノ教会) ニ始源ヲ有スル。»<sup>(56)</sup> [符号・

番号は筆者、( )内は変異綴)と誌されてゐてその数も著しく増加してゐる。ここにいふ ecclesia (教会)とは異端信徒の拡大に伴って形成された地方別の組織単位であつて、ordo (宗門)、或いは diocesis (司教区)とも表現される。

Rainerius 所出の内、最初の六教会(①-⑥)はイタリアに位置する<sup>(57)</sup>。唯、① E. Albanensium の呼称語源についてはイタリアの一都市 Albano に由来するとする説(Söderberg)、東欧 Albania とする説(Dondaine)、小アジアの Albania とする説(Roché)<sup>(58)</sup>があるが、いずれも決定的なものではない<sup>(59)</sup>。

⑦はフランス北部全域に散在する信徒を網羅するもので、成立はおそらくフランス最古であるが Rainerius 記録成立時にはすでに潰滅してゐたはずである<sup>(60)</sup>。⑧⑨⑩の三教会はそれぞれその名の示す通り、Toulouse, Carcassonne, Albi を中心とする異端集団である。Guiraud はこの他に、糾問記録の検討から Razès 教会(E. Rodensis)及び Agen 教会(E. Agennensis)の存在を証明し<sup>(61)</sup>、Borst は更に Val d'Aran 教会(E. Aranensis)を加へて南仏六教会とした<sup>(62)</sup>。その中、Albi 教会は十三世紀に入ると関係史料が激減し、しかも漠然たる内容のものばかりとなるので、その実勢力は取るに足らぬものであったと考へられる<sup>(63)</sup>。これに対して、南仏カタリ派に圧倒的な指導力を発揮したのは Toulouse のそれであつた。但し、教会といひ司教区といふも、公教会のその如く厳密な職制や管区があつたやうには、少くとも南仏の場合には、見受けられない。Toulouse 教会を領導した三大異端者たる、Bernard de la Mothe, Bertrand Matry, Guilbert de Castres が同時に Toulouse の司教(episcopus)であつた時期があるし、その活動範囲も決して Toulousain 内に限られてはゐない<sup>(64)</sup>。十字軍と糾問の追求に分断されて恒常的な信者管理制度の編成が不可能であつたこと、及びここではカタリ派内部に教義をめぐる分派の抗争が生じなかつたこと、等によって教会区分は寧ろ理念的な存在に留まつたかの如くである。少くともここでは、イタリアや東欧の場合と同じ次元での重要性を持つてはゐない。

上述の異端宗会史料の五教会①~⑤、及び R. Sacconi の六教会①~⑥が東欧のボゴミリ派の中に存在したことは明かであるが、その相互比定、更に現実所在地への比定は結論が得られぬまま、カタリ派研究史上の問題点の一つとなつてゐる。宗会史料所出の① Melenguia 教会は、Macedonia 東部の地名 Melnik の転訛であつて、所在もまた同処と推定されて居り、R. Sacconi に見えないのは、一世紀弱の間に消滅したものとされてゐる<sup>(65)</sup>。そして、これに替つてコンスタンティノープル③が登場する。これと Nicetas との関係を示す史料がある所から、1167年以前にすでに萌芽的な形で存在が推測される<sup>(66)</sup>。同地のラテン人教会②は十三世紀初頭ラテン帝国の成立とともに西欧の十字軍士たちが組織した異端者集団で、以後在来のものと同併存したのである<sup>(67)</sup>。次に、Romania 教会④が Philadelphia 教会④に相当することについて異議はないが、その現実所在地への比定に関しては、端的に所在不明とするもの<sup>(68)</sup>、バルカン半島内に求めるもの、小アジアに求めるもの、等意見が分れてゐる<sup>(69)</sup>。また、Sclavonia 教会⑤がバルカン西北部乃至アドリア海東岸、主としてボスニアの異端者を指したことでは諸説ほぼ一致してゐる<sup>(70)</sup>。但し、これが Dalmatia 教会⑥の後身であるとは即断し得ない。半島西北部の二元論異端者群は、西欧史料ではパタリニ派(patarini)と一括概称されて半島内陸部、東部のボゴミリ派と区別されることもあるが、その内には、Bulgaria 教会の系統に立つこの Sclovonja 教会とは別に、コンスタンティノープルの傘下にある所の、伝播経路及びそれに伴つて教説を若干異にする他の異端者がダルマティア、イストリアにゐたからである<sup>(71)</sup>。かくて Dalmatia 教会⑥と Sclavonia 教会⑤とは恐らく並立してゐたものであらう。Drogometia 教会⑦は語形から見ても Dugunthia 教会⑧に対応するものと解されるが、その所在については、Tragurium を中心としてダルマティア、イストリアに展開してゐたとする説<sup>(72)</sup>と、Thracia 奥地の Dragovitsa 河近傍であつたとする説<sup>(73)</sup>とが対立してゐる。筆者は後説に随ふ。最後に、Bulgaria 教会③⑤の所在は従来單純にその名の示す通りブルガリアとさ

れて疑はれることもなかったが、Filipov の考証によってよりせまくマケドニアと限定され、以後これが殆んど定説となつてゐる<sup>(74)</sup>。

かくの如く、諸教会の地理的所在の解明が研究者の関心呼び紛糾を招くのは、これが単に展開範囲と伝播経路の劃定の問題だけでなく、教義上の分派と系譜の問題に関連してゐるからである。周知の通り、カタリ派には基本教義の解釈をめぐる二つの大きな流派が存在してゐた。すなはち、双方とも善悪二原理の対立を世界観の出発点に置くのではあるが、一つはそれぞれ完全に自律的でまた相互に無縁の二原理が、対等の比重で、且つ無始無終の永劫の中に対立すると解する一派であり、これに対して他は、悪の原理の善の原理に対する従属性を想定し、第一原因は善の原理のみであつて、始源的には善に属する一要素の墮落から悪が派生したと考へる者達である。後者における悪の劣位性が著しく強調される場合には、公教会の正統教義と近接する。これら両系統は、絶対二元論派と稔和二元論派 (dualistes absolus et dualistes mitigés; absolute dualists and moderate dualists)<sup>(75)</sup>、二元論派と究極一元論派 (dualistes et monarchiens)<sup>(76)</sup>、過激派と稔和派 (Radikalen und Gemässigten)<sup>(77)</sup> などの名の下に区分されるのが普通である。ただ、D. Roché は、この区分は専ら公教会史料のみに依拠した皮相な観察であるとして、分派の存在を否定する。彼によれば、カタリ派は教説の釈義・宣布・保持に当って二重の運用を行ったのであり、対民衆説教の場合には、善き果実は善き樹よりのみ生じ、悪しき果実は悪しき樹よりのみ結ばれるとする明快な二元論 (dualisme) を用ひ、教団内部では一種の奥義、秘義として善の中における悪の起源、そして善にとっての悪の役割などを説く一元論 (monisme) を伝承し、いはば全カタリ派には公開教義 (exotérisme) としての二元論と秘教 (ésotérisme) としての一元論が同時に併在してゐたのであつて、各地方教会別の、いはば空間的な分派の存在を考へるのは誤りであるとされる<sup>(78)</sup>。確かに、分派に関する報告は公教会史料のみに見えて異端側史料はこれについて緘黙して居り<sup>(79)</sup>、またかかる教義問題の煩瑣な解釈は異端教会の指導者や神学者のレヴェルでの問題であつて異端者一般の実践倫理にとっては両説いづれであらうと本質的な関係を有せず<sup>(80)</sup>、更に異端者相互間に教義をめぐる深刻な闘争の痕跡も見られない。また、説教には全教義が公開されず精通者のみに留保される奥義めいたものもあつた模様<sup>(81)</sup> あるし、それに、カタリ派が本質的に二元論者であつたか、或いは一元論であつたかの識別は、そのいづれの派の証言においても特有の曖昧さがあるために、必ずしも容易でないのであつて<sup>(82)</sup>、一見 D. Roché の解釈によってすべてが説明され得るかに見えるのである。しかし、西欧における教説の受容と教団形成の時期に、イタリアでは教義をめぐる諸教団が分立したのは事実であるし、十三世紀前半期にカタリ派最大の神学者 Jean de Lugio が《両原理論》(De duobus principiis) を執筆した意図は、次第に拡大する稔和二元論の影響力に対抗して、絶対二元論の教義を集成純化し一つの典拠を造ることにあつたのであり<sup>(83)</sup>、また同じ頃逆進に稔和二元論の伝承を整序すべく Desiderius が腐心したのであつた<sup>(84)</sup>。《カタリ派諸教会ハ、相異リ、相反スル見解ヲ有スルトキニモ、相互ニ受容レル。但シ、albanais ト concorreziens トハ相互ニ断罪シテ、例外ヲナス》<sup>(85)</sup> など分派に関する最も詳しい報告を残した R. Sacconi は、初め異端者、それも指導的地位の異端者で、後に公教に復帰した人物であるから、その報告には単なる外部からの観察以上の正確さを期待してよいであらう。かくて、D. Roché の説は俄かに従来の通説を覆へすには足りず、両分派は空間的に夫々の地歩を占めて、平行的に厳存したと考へられる。

すでに触れた如く、分派は西欧で初めて発生したものではない<sup>(86)</sup>。両派とも東欧に源流を有し、上引 R. Sacconi が《スペテノ教会ハ、末尾ノニツニソノ始源ヲ有ス》と述べてゐる通り、両派はそれぞれボゴミリ派内の Dugunthia 教会及び Bulgaria 教会から派生してゐる。Bonacursus は Dugunthia 教会について、《Dugrutia (= Dugunthia) ヨリ己レノ教会ヲ得タル異端者ヲハ、始源モ終末モナキニツノ主ガ存スト信ジ且ツ説ク》<sup>(87)</sup> と、明確に、これが絶対二元論の教会であることを記録してゐる。また、絶対二元論宣布のために西欧を巡歴した、《コンスタンティノープルの

国々ヨリ来リシ者》<sup>(88)</sup> たる Nicetas が恐らく同地ギリシア人教会の司教であったこと<sup>(89)</sup> から、同教会が Dugunthia 教会の系譜下にあり、更に同人が《ブルガリア人、クロティア、ダルマティア、並ビニハンガリア人ノ境域ニ住ム所ノ、カレラノ教皇》<sup>(90)</sup> と言はれてゐるのが、莫然と東欧を指したのでないとするれば、ダルマティア教会とコンスタンティノープル教会との関係を示すものに他ならない。また 穂和二元論派の教義書 *Interrogatio Johannis* を西欧にもたらした Nazarius が《ブルガリアノ司教》<sup>(91)</sup> であったことから、同教会が穂和二元論派に属したことも容易に推定される。これらの関係は、イタリアの絶対二元論派がコンスタンティノープルに、穂和二元論派がブルガリアに、それぞれ自らの司教の叙階・祝別を求めた事実とも適合するし<sup>(92)</sup>、また、他にこれと矛盾する史料も見出されない。かくて、十二世紀後半から十三世紀に至る、西欧におけるカタリ派確立の時期に、東欧での主要な分派配置が、絶対二元論派として Dugunthia-Constantinople(Gr.)-Dalmatia、穂和二元論派として Bulgaria-Sclavonia となつてゐたことは、ほぼ確定的な知識として整理することが出来る状態にある<sup>(93)</sup>。

しかし、より以前にボゴミリ派の内部において分派が発生した事情に関しては、未だ最終的な結論の得られる段階ではない。そもそも分派発生の直接史料は皆無であり、異端者自身両説分離に関する記憶を伝承してゐないのである<sup>(94)</sup>。ともに外部からの観察ではあるが、ボゴミリ派の教義に関する二大史料とされてゐるのは、十世紀後半の Cosmas の《異端弁駁》(*Sermones contra haereticos*)、及び十一世紀末乃至十二世紀初の Euthymius Zigabenus の《教理防護》(*Panoplia Dogmatica*) である。Euthymius の報ずる異端の教義は明確に穂和二元論であるが<sup>(95)</sup>、Cosmas はかれらの厳格な二原理の系列について語つてゐる一方、必ずしも整序された形ではないが両原理の相互関係をも指摘した箇所があつて<sup>(96)</sup>、彼によって記述された異端説は研究者によって絶対二元論派と解されたり、穂和二元論派と取られたり、解釈が岐れてゐる。Niel は前者の立場を取つた上で、Cosmas は絶対二元論派、恐らく Dugunthia 派乃至その前身のみを観察し、Euthymius は穂和二元論派、恐らく Bulgaria 派乃至その前身のみを探索したものであらうとして、最初からボゴミリ派内に二派が分立してゐたと解した<sup>(97)</sup>。Runciman も、同様の立場に立つが、両史料の相違を教団教義の時間的發展を示すものと把握して、Cosmas 段階における全ボゴミリ派は小パオロ派の延長線の上にあつて絶対二元論を奉じたが、ビザンツに拡大するに及んで神学的関心が高まり教義体系の整備が問題とされる過程の中で、教団に分裂を生じ、伝統的な絶対二元論を保持する Dugunthia 派と、革新的な穂和二元論を主唱する Bulgaria 派の両派が形成され、後者が Euthymius の視野の中に捕捉されたのであると主張してゐる<sup>(98)</sup>。彼よりも以前に、J. Guiraud も、別段論証の過程を示すこともなく、また、分派全体の鳥瞰を意図したのでもないけれど、Bulgaria 教会は初め絶対二元論派であつたが、1230年頃に穂和二元論に転じたとしてゐる<sup>(99)</sup>。しかしながら、これら三説の出発点となつてゐる Cosmas 所報のボゴミリ派を絶対二元論派とする把握の仕方には無理があるやうに考へられる。註(96)に引用した Cosmas の記事は短文ながら、そしてまた Euthymius に見られる場合とは始源における両原理の関係の仕方が相違してゐるものの、やはり歴然たる穂和二元論派の徴象を具へてゐると見るのが最も自然である。ただ、彼の観察の対象者が悉くそのやうな説を奉じてゐたのか、或ひは一部にそのやうな者がゐたのかといふ点、必ずしも明瞭でないだけである。かくて、上引三説の妥当性は疑はしいといふ他ない。Runciman のいふ法灯分裂及び Guiraud のいふ十三世紀前葉における教義の急転回に関しては、これを支持する根拠は全くないのである。これらとは別に、Borst は、バルカンの山岳地帯に成立した初期ボゴミリ派は極めて素朴な敬虔運動の一種にすぎず、これが教義体系を具備するのは十一世紀東帝国の首都周辺に拡大した後のことで、その時に初めて両派が誕生したとしてゐる<sup>(100)</sup>。結論的には Runciman と相似るのであるが、これは Cosmas の報告を完全に無視してゐる。Cosmas における異端者は決して単純素朴な心情主義的段階の運動ではない。すでに基督論・救済

論・經典論以下細部に至るまで二元論教義の諸要素を具備してゐるのである<sup>(101)</sup>。ところで、Cosmas の記事に即して、ボゴミリ派は最初から稷和二元論派であったと規定するのは Obolensky である。彼によれば、小パオロ派及び Massalians が融合し、且つ個有の条件の中で民族化、風土化、ブルガリア化したものが稷和二元論を奉ずる、個有の意味におけるボゴミリ派で、マケドニアを舞台として生成した。他方、トラキア及び東ブルガリアには純粹の小パオロ派が保存された。後に、前者がいはゆる Bulgaria 派となり、後者が Dugunthia 派となる。そして両者一括して広義のボゴミリ派として捉へられるに至った。両派はボゴミリ派内部での分裂や急転回等を恣意的に仮定するよりも、小パオロ派とボゴミリ派の間の周知の差違によって、よりよく説明され得ると、彼はいふのである<sup>(102)</sup>。Cosmas の記述に、上に指摘した通り、若干の曖昧さがあることがこの説の難点ではあるが、バルカン半島に真正小パオロ派が比較的長く存続してゐたことはすでに証明された事実であるので<sup>(103)</sup>。現在の処、この説を最も妥当に近いものと見て良いであらうと思はれる。無論、このことは、西欧カタリ派内の絶対二元論を真正小パオロ派のそのままの延長であるとする単純な図式化を許すものでは、決してない。祈禱唱文として専ら主の祈り (Pater Noster) を用ひること、苛烈な禁慾主義に立脚する戒律を有すること、等はボゴミリ派関係史料に見られて小パオロ派関係史料に欠けてゐる標識であるが<sup>(104)</sup>、西欧カタリ派中の絶対二元論派はこれらの標識を完全に具備してゐる。全体として西欧における両派間の距離は、ボゴミリ派と小パオロ派の間のそれとは到底比較にならぬ程狭いのである。両分派の始源については、Obolensky 所説の通りであるとしても、東欧、或いは西欧の、いずれかの段階における両派の相互滲透と内発的変成を想定せざるを得ない。Borst のいふやうに、《カタリ派とボゴミリ派とは決して相互に同一物ではない》からである<sup>(105)</sup>。分派の形成に関しては、未解決の問題が山積してゐるといふべきである。

然らば、西欧カタリ派における分派の配置状況は如何であらうか。分派問題が表面化したのは特にイタリア・カタリ派の場合であるが、その大きな区分については殆んど異論がなく、ほぼ確定的な知識として承認される段階に達してゐる<sup>(106)</sup>。即ち、絶対二元論派の中心勢力をなしたのが Desenzano 教会で、Firenze, Spoleto 両教会がこれと同一の系列下に在った。かれらは、系譜と親縁性を示す drugunthii なる呼称で呼ばれることもあったが、十三世紀前葉に至り絶対二元論派の総括的名称として語義未詳の albanenses (les albanais) が確立する。この集団と教説に関する史料は豊富に知られてゐるが、その内から典型的な一例を引用する。即ち、Desenzano の異端者に関する一報告は次のやうに述べてゐる。《一ハ全ク善ニシテ、他ハ全ク悪ナル、二ツノ主ガ初メモ終リモナク定在スルト、カレラハ説キ且ツ確信スル；而シテ、善ナル(神)ハ善ナル諸天使ヲ、悪ナル(神)ハ悪ナル諸天使ヲ、夫々ニ創レリト云フ》<sup>(107)</sup>。絶対二元論派内部の下級区分として、教説をより合理的に理論化、体系化せんとした Jean de Lugio 派と、より伝統に忠実たらんとした Balasinansa 派とが知られてゐる。これに対し、稷和二元論を奉じたのは Concorezzo 教会であつて、そこからそのまま稷和二元論派を意味する名辞 concoretii (les concoretians) が生じた。十三世紀に入ると、同教会の指導者の名に由来する garatenses なる名称が出現する。かれらの教説の特質と系譜をよく示して、一史料は次のやうに語つてゐる。《ソノ異端説ヲ Sclavonia ヨリ、又他ノ或ル者タチハ Bulgaria ヨリ得タル異端者ヲハ、諸天使並ビニ四大ヲ創造セル、初メナキ、唯一全能ノ神ヲ信ジ、且ツ宣ベ伝フ。又、ルキフェルトコレニ随フモノドモハ天界ニテ罪ヲ犯セリト云フ；サレド、カレラノ罪ハ何処ヨリ来レルカラ疑フ》<sup>(108)</sup>。同じく基本教義の上では稷和二元論派であつて concoretii と大差のない信条を持つてゐたが、教団の組織と運営の上でこれに同調しなかつたために、中間派 (Mittelgruppe)<sup>(109)</sup> とされることもあるのが Bagnolo 教会及び Vicenza 教会である。Concorezzo 教会がブルガリアと連携を保つたのに対して、Bagnolo 教会は特に Bosnia に接近し、Vicenza 教会は他と結ぶことなく独立を維持したのである。Bagnolo 派を示す語としては、bagnolenses, baiolenses, caloiani (初代司教 Caloian の名に由来)、sclavini

等が用いられたが、これらもまた広義に稔和二元論派の別称と解して差支へない場合が多い。イタリアにおけるこのやうな諸分派の展開は、東欧から両派が同時に競合しつつ伝播された結果生じたのではない。まづ西欧を蔽ったのは主として Sclavonia 教会を発源地とする、いはゆるパタリニ派の稔和二元論であった。西欧で異端者の組織形成が問題となる、正しく決定的な段階において、Nicetas に代表される絶対二元論派の関与介入が行はれ、その結果諸派の転回或ひは守旧による分離が生じたのであった。また、上記中間派の出現にも見られるやうに、組織上の權威を何処に求めるかといふ宗団管理の契機も働いてゐるし、更に指導者の品行風紀問題も絡んでゐて、恰も授礼聖職者の個人的資質と秘蹟の効果をめぐって正統教会内部から異端が析出されたのに似た現象が異端教会内で再現してゐるのであって、異端教会そのものの体制化の徴候が見られる。かくて、イタリアにおける諸派分離は必ずしも純粹の教義問題にのみ還元できない<sup>(110)</sup>。ともあれ、イタリアで異端内部の問題が表面化したことは、其処での展開が著しかったにも拘らず、社会的条件に規定されて、政治的に重要な階層を捲き込むことが比較的少なく、最後まで比較的純粹な宗教現象として終始したことと並んで、イタリア・カタリ派の大きな特徴をなすものであらう。

これに対し、南フランスの場合には、まづ最初に弘布したのが、おそらく稔和二元論であったと推定されるのは同様であるが、異端宗会開催によって組織と教義の確定が行はれた時、絶対二元論に統一され、以後教義問題をめぐる紛争を見ない。南仏カタリ派は全体として *albanenses* であり *drugunthii* であった。一史料はかれらを指して、*«Drugutia (=Dugunthia) ヨリソノ謬説ヲ得タル, albigenses ト呼バルル異端者ヲ»*<sup>(111)</sup> と記してゐる。Nicetas 以後は東欧の諸教会と組織の根柢にかかはるやうな恒常的連携の証跡が全く見出されないことも関連して、南仏内部での諸教会相互間の区別は殆んど意味をなさず、相互に流動的であった。上述 Sacconi による南仏三教会の挙示は、寧ろ東欧及びイタリアのそれと文体形式上の均一を重んじたものと見るべきであらう。少くとも、教会区分の持つ意味は、その重要さにおいて到底他地方のそれに及ぶものではない。しかしながら、南仏の異端者全員が全く同一の信条、同一の信仰を奉じてゐたわけではない。紛れもなく稔和二元論の奥義書たる偽福音書 *Interrogatio Johannis* はこの地に弘通してゐたのであるし、アルビジョア騒乱の第一級史料たる Pierre de Vaux-Cernay の*«アルビジョア史»*も、*«創造者ハ唯一ナレド、二人ノ子、即チ基督ト悪魔ヲ有セリト語ル爾余ノ異端者モ居タ。コノ者達ハ、被造物ハ悉ク善ナリシガ、黙示録ニテ読知ラルル娘ラニヨリ凡テハ悪ニ化サレタ、トモ語ッタ»*<sup>(112)</sup> と明記してゐる。また、同地の糾問廷における供述の中には、断片的にはあるが、稔和二元論の系統に属すると思はれる信条の表明が少なからず見出される。かくて、南仏カタリ派の場合には、組織の基本点における統一が保持され、教義をめぐる若干の差異は寧ろ異端者個々の問題たるに留まって、分派として顕在化するに至らなかつたと見るのがより正確であるかも知れない。このことは、恐らく南仏カタリ派が他国に見られぬ程に組織的な攻撃と追求に晒されたこと、および特有の社会的・政治的条件に支へられて重要な諸階層を大規模に薙卷した事実と無関係ではないであらう。

ともあれ、南仏カタリ派が、新マニ系異端運動全体の中で占める位置は、凡そかくの如くであつた。

(55) *<Ecclesiae Romanae et Drogometiae et Melenguiae et Bulgariae et Dalmatiae sunt divisae et terminatae, et una ad alteram non facit aliquam rem ad suam contradictionem, et ita pacem habent inter se: similiter vos facite.>* Notitia conciliabuli apud S. Felicem de Caramen, sub Papa haereticorum Niquinta celebrati. Bouquet, *Recueil des Historiens de Gaule et de France*. t. XIV, cit. in: Obolensky, op. cit., p. 245.

(56) *<Quot sunt ecclesiae catharorum. Sunt autem XVI omnes ecclesiae catharorum; nec imputes mihi lector quod eas nominavi ecclesias, sed potius eis, quia ita se vocant. Ecclesia Albanensium*

vel de Donnezacho, Ecclesia de Concorrezo, Ecclesia Bajolensium sive de Bajolo, Ecclesia Vincentina sive de Marcha, Ecclesia Florentina, Ecclesia de Valle Spoletana, Ecclesia Franciae, Ecclesia Tolosana, Ecclesia Carcassonensis, Ecclesia Albigensis, Ecclesia Sclavoniae, Ecclesia Latinorum de Constantinopoli, Ecclesia Graecorum ibidem, Ecclesia Philadelphiae in Romania, Ecclesia Bulgariae, Ecclesia Dugunthiae, et omnes habuerunt originem de duobus ultimis. > Rainerius Sacconi, Summa de catharis et leonistis. cit. in: Obolensky, op. cit., p. 157. et Guiraud, op. cit., t. I, p. 196, n. 1

- (57) ①は主として Desenzano に、②は Lombardia 地方に、③は主として Toscana に、④は Venezia を中心として、⑤は Firenze 周辺、⑥はほぼ教皇領を蔽ふ地域に展開してゐた (Guiraud, op. cit., t. I, pp. 197-199; Borst, op. cit., SS. 235-239). なお Borst は、十二世紀中葉イタリアで最も早く成立し、上記六教会分立の母胎となった Lombardia 教会を一つに算へてイタリア・カタリ七教会としてゐる (ibidem S. 101 sqq., S. 235 sqq.). — フランスと異りイタリアのカタリ派は教義をめぐる内部対立を経験してゐるので、信者の分属関係は複雑でこれら教会は単なる地縁的編成ではなく、地理的には相互に相蔽ふ所がある。①及び②は、教義においても、規模においてもイタリア・カタリ派を代表する二大集団であつて、最盛期に、爾余の諸教会の100名乃至200名にに対し、②は1500名の異端完徳者 (perfecti) を擁してゐたといはれる (Guiraud, ibidem; Runciman, op. cit., p. 115).
- (58) Roché, op. cit., p. 50 — 尚、諸説の比較検討については Nelli, Phénom. cath., p. 130, n. 1 参照
- (59) Borst は全く不明と断定し、唯この名の発生が1214-1235間であること、及び東欧アルバニアに由来することだけは確實であると附言してゐる (op. cit., SS. 244, 245) — albanenses は実は albigenses ではないかとの推測もなされては居る (Delaruelle, Catharisme en Languedoc vers 1200. Annales du Midi, 1960. pp. 152, 165) が、未だ推測の域を出ない。
- (60) Guiraud, op. cit., t. I, p. 201
- (61) ibidem, pp. 201, 206, 207.
- (62) Borst, op. cit., SS. 231-235
- (63) ibidem, S. 93; Guiraud, op. cit., t. I, pp. 201, 202
- (64) Guiraud, op. cit., t. I, pp. 203-206
- (65) Borst, op. cit., S. 213; Obolensky, op. cit., pp. 156, 157; — Roché はこれをコンスタンティノープル近傍としてゐる。但し根拠は示されてゐない (p. 51)
- (66) Guiraud, op. cit., p. 199 sqq.
- (67) Obolensky, op. cit., pp. 157, 158; Borst, op. cit., S. 213.
- (68) Guiraud, op. cit., t. I, pp. 199-201.
- (69) 夙にこれを Roumélie 東部すなはち現ブルガリア南部に比定したのは Schmidt である。但し、その論拠となつてゐるのは、小アジア諸教会は別に挙示されてゐるから、といふことにすぎない。その後、Racki が、西欧中世作家の用法では Romania が Thracia を指す場合の多いことから Philadelphia を Thracia の Philippopolis と推定する考証を行ったが、Obolensky もこの説を採用してゐる (op. cit., p. 159 sqq.). — これに対して、小アジア説を唱へるものには、西欧の学者では Dondaine 及びこれを支持する Borst がある。かれらの理由は十二世紀・十三世紀作家の用法における Romania とは古代ローマ帝国の版図であつた地域内の何処をも指すが、特に Lydia を示す用例が多いといふことである。東欧の学者では Filipov が同説に左祖してゐる。— いづれにせよ、判断の岐路は専ら地名史の考証にかかつて居り、事実に関する史料があるわけではないから、両説ともに未だ決定的な正当性を主張し得るものではあるまい。
- (70) Guiraud, op. cit., t. I, p. 200; Runciman, op. cit., p. 97 sqq.
- (71) Runciman, op. cit., pp. 98, 99; id., Byzantium and the Slavs. in: ed. Baynes, Byzantium. An introduction to the East Roman Civilization. Oxford, 1948. pp. 353, 356, 362; W. Miller, The Byzantine inheritance in South-Eastern Europe. ibidem, pp. 330, 334.
- (72) Guiraud, op. cit., t. I, p. 201; Niel, Albig. et cath., p. 43; Runciman, Le manich. méd., pp. 92, 187 — Guiraud は, Tragurium の西欧転訛が Drogometia 乃至 Dugunthia であるとした Schmidt の推定を踏襲しているにすぎないが、Runciman 及び Niel は Dalmatia 地方の異端者が此地に伝道者を派遣した母教会の名に因んで、言はば <Dugunthia 派> の意味でこの名称を唱へたとしてゐる。さうとすれば新旧二つの Dugunthia 教会を想定せねばならなくなるし、又既出の Dalmatia

教会の挙示との関係を論証せねばならなくなるであらう。いづれにせよ、Dalmatia に比定する説は困難と考へられる。

- (73) Obolensky, op. cit., p. 158 sqq.; Borst, op. cit., S. 213
- (74) Obolensky, op. cit., pp. 160, 161; Borst, op. cit., ibidem. — サミュエルのブルガリア王国旧領、即ち十一世紀のビザンツ帝国ブルガリア軍管区をブルガリアと呼ぶのが十一世紀東欧作家の慣用であり、この地が Skoplie を中心とするマケドニア地方にほぼ合致する。十二世紀末以後のブルガリアは、バルカン東部の総称となるが、R. Sacconi はその利用資料から推して旧慣によったであらう、といふのが Filipov の考証の要点である (Obolensky, loc. cit.)
- (75) Paul Alphandéry, *Les idées mor.*, p. 92 sqq.; René Nelli, *Théories de l'âme et de la liberté dans le catharisme occitan et lombard.* in: éd. id., *Spiritualité de l'hérésie. Le catharisme.* Paris, 1953, p. 130 sqq.; Niel, *Albig. et cath.*, p. 40 etc.
- (76) J. Guiraud, op. cit., t. I, p. 37 sqq. etc.
- (77) Borst, op. cit., passim; Fr. Koch, *Fruaenfrage und Ketzertum im Mittelalter.* Berlin, 1962. passim.
- (78) D. Roché, op. cit., p. 155, p. 186 sqq.
- (79) Nelli, *Phén. cath.*, p. 21
- (80) Guiraud, op. cit., t. I, p. 38; Alphandéry, p. 92 sqq.; Nelli, *phén. cath.*, p. 66 sqq.
- (81) 異端者が民衆への説教に当って、教義の全部を公開したのではないことについては、異端神学者 Jean de Lugio に関連して R. Sacconi が以下の如く述べてゐる。《又、ヨク心ニ留ムベキハ、上記 Jean 並ビニソノ仲間たちハ、ソノ信者ラガコレラ新シキ謬説ノ故ニカレラノモトヲ離去ラザラムガタメニ、己レノ信者ラニ上述ノ謬説ヲアカサムトハ敢テナサザリシコトデアル》(〈Est etiam valde notandum, quod dictus Johannes et ejus complices non audeant revelare dictos errores credentibus suis, ne ipsi credentes discedant ab eis propter hos novos errores.〉 Rainerius Sacconi, *Summa de catharis et pauperibus de Lugduno.* cit. in: Borst, op. cit., S. 122, Anm. 10). 又、これとは別に、糾問廷における一つの供述も次のやうに語ってゐる。《サテ、カレラハ、極メテ親シク且ツ確タル者たちニ非ザレバ、己レノスベテノ信者ラニ対シテ凡テヲ語り、明カシ、説クコトヲセヌ旨、コノ者ハ語ッタ》(〈Item, dixit, quod non omnibus credentibus suis dicunt nec revelant nec praedicant omnia, nisi bene suis familiaribus et firmis.〉 Doat, cit. in: Alphandéry, op. cit., p. 38, n. 2)
- (82) 二元論者は、二神の存在を確信したのであるが、その中の一神だけを信仰したのである。これは自明のことであるが、例へば糾問官の訊問の仕方によって、又被告の受取り方によって、更に被告の戦術的配慮の如何によって、供述は変化し、記録は、《カレラハ二神ヲ信ズ》(duos Deos credunt) とともに《唯一神ノミヲ信ズ》(solum Deum credunt) ともなる。単純に記録から両派のいつれに属すると断定できない所以である。——古マニ派において既にこの種の混乱のあることについては、Nelli, *Le Phén. cath.*, pp. 20, 21.
- (83) R. Nelli, *Le Phén. cath.*, pp. 67, 68; id., *Les textes cathares.* in: éd. id., *Spiritualité de l'hérésie: Le catharisme.* p. 143 sqq.
- (84) Borst, op. cit., pp. 12, 122
- (85) Rainerius Sacconi, trad. et cit. in: Roché, op. cit., p. 54
- (86) この点について諸家の見解が一致してゐるわけではない。イタリア・カタリ派教義史の大家 A. Dondaine は、カタリ教説は本来絶対二元論であり、稔和二元論は十三世紀に発現したにすぎぬとしてゐる。(id., *Un traité néo-manichéen du XIIIe siècle. Le liber de duobus principiis.* Roma, 1939. p. 17 cit. in: Nelli, *Théories de l'âme et de la liberté dans le catharisme occitan et lombard.* in éd. id., *Spiritualité de l'hérésie.* p. 119, n. 3) 但し、教義史上の微細な観点からはともかく、東欧ボゴミリ派展開と西欧諸派との関連の全般的景観からみて、この説は明かに事實に適合しない。
- (87) <Haeretici, qui habent ordinem suum de Dugrutia, credunt et praedicant duos Dominos esse sine principio et sine fine.〉 Bonacursus, *Contra Catharos.* cit. in: Obolensky, op. cit., p. 162, n. 1
- (88) <adveniens... de constantinopolitanis partibus.〉 *De haeresi catharorum in Lombardia.* cit. in: Borst, op. cit., S. 96, Anm. 24

- (89) Borst, *ibidem*.
- (90) *supra*. 註 36.
- (91) *supra*. 註 38.
- (92) *infra*. 註 110.
- (93) Sclavonia 教会が稗和二元論派に属したことについては Runciman, *op. cit.*, pp. 97-99 参照.
- (94) 《初メ一体ニテアリシカタリ派ノ数多ノ者ドモ、先ツ二ツニ、然ル後六ツニ分カタル》 (<Multitudo catharorum prius in unitate consistens, in duas primo divisa est et postea in sex.> Rainerius Sacconi, *De haeresi catharorum in Lombardia*. cit. in: D. Roché, *Problème du mal et du salut*. in éd. Nelli, *Spiritualité de l'hérésie*. p. 169, n. 2). 又、《一方ハ他方ヲ救ハレザル罪ナリト断ズ。スナハチ albigenses (=絶対二元論派) ハ concorrici (=稗和二元論派) ニ対シテ、吾ラハ神ノ教会ナリ、カレラハ吾ラヨリ離出デタルナリト云フ。逆ニ concorricii モ亦同ジク云フ》 (<Unus alterum ad mortem condemnat, dicentes albigenses adversus concorricios, se esse ecclesiam Dei, et dicentes illos... "a nobis secessi sunt"; et e converso concorricii vero dicunt illud idem...> Burce, *Liber supra stella*, cit. in: Borst, *op. cit.*, S. 214, Anm. 4) のやうな報告があるのは事実であるが、前者はその教会数から見てイタリアにおける教団の分裂を語ってゐることが明かであるし、後者は対立する教団がそれぞれ自己の正統性を主張してゐるに過ぎず、ともに分派の起源について語ってゐるのではない。
- (95) 《Satan ハ父ナル神ノ長子デアリ、子ニシテロゴスナルモノ (=基督) ノ兄デアッタ。Satan 初メノ名ハ Satanael デアッタガ、神ニ叛キ地ニ墜チテ後 Satan トナル。el ハソノ神ニオケル起源ヲ示ス。》 trad. et cit. in: Obolensky, *op. cit.*, p. 207
- (96) 《万物、即チ穹窿、天日、星辰、気風、人類、十字、悉ク悪魔ニ属ストカレラハ云フ。神ヨリ来レルスベテノモノヲカレラハ悪魔ニ帰ス。総ジテ、カレラハ、生アルモノタルト生ナキモノタルトヲ問ハズ、悉皆ヲ悪魔ノ有ナリト称ス。》。《吾ラノ主ノ福音書ニテ二人ノ息子ノ寓喩ヲ聞知リタルカレラハ、基督ハ長子ニシテ、悪魔ハ父ヲ欺キシ次子ナリトナフ。悪魔ヲ Mammon ト呼び、地上万物ノ創造者トナス。》。《カレラハ悪魔ヲ以テ人間ノ創造主、神ノ被造物ノ創造主トナス。甚シキ迂愚ニヨリ、カレラノ中ノ或ル者ハ悪魔ヲ墮チタル天使ト呼び、他ノ者ハ不義ノ下僕トナス。》 trad. et cit. *ibidem*, pp. 121-123 勿論、示唆された寓喩は Luk., XV, 11-32; XVI, 1-9.
- (97) Niel, *Albig. et cath.*, pp. 39, 40.
- (98) Runciman, *op. cit.*, p. 66 sqq.; *id.*, *Byzantium and the Slavs*. ed. Baynes, *Byzantium. An introduction to the East Roman civilization*. Oxford, 1948. p. 353.
- (99) Guiraud, *op. cit.*, tome I, p. 200.
- (100) Borst, *op. cit.*, SS. 66-71.
- (101) その現世観・人間論・救済観・基督論・経典等については、Obolensky, *op. cit.*, p. 122 sqq.; Runciman, *Le manich. méd.*, p. 61 sqq.
- (102) Obolensky, *op. cit.*, p. 124, n. 3; pp. 151-167 — 尚、ボゴミリ派に関する最も早い報告、コンスタンティノーブル総主教 Theophylact 書簡(執筆推定年代、940-950)が当面の異端を<古き異端>であると同時に<新しき異端>であるとし、これと小ペオロ派との関係をのべて<小ペオロ派と混合せるマニ派>としつつも、これとは別個に本来の小ペオロ派の存在をも指摘してゐることを、Obolensky はボゴミリ派の起源に関する自説の傍証として引いてゐる。当時バルカン半島における真正マニ派の存在は立証され得ぬから、ここにいふ<マニ派>はマツサリア派に他ならないと彼は解するのである (*ibidem*, pp. 111, 112)。無論、彼もこの二系統の異端説の単純な混合からボゴミリ派が形成されたといふのではない。現在の制度に対する不満と原始教会的福音主義への復帰の強い希求に支へられた教会改革運動の中で、これら両異端説が融合され再形成されたので、その意味ではボゴミリ派は二元論と正統基督教との調和の試みであつたともいひ得るとしてゐる。 (*ibidem*, pp. 138, 139)
- (103) Borst, *op. cit.*, p. 65 — 八世紀末以来、遅くとも九世紀には小アジアから小ペオロ派の伝道者の波がバルカン半島に打寄せてゐる。後、ビザンツ帝国によってかれらの半島内への大量強制移住が行はれる。なほ真正小ペオロ派存在の痕跡は十二世紀に至るまで確認されてゐる。
- (104) Obolensky, *op. cit.*, p. 138.
- (105) Borst, *op. cit.*, S. 71.
- (106) Niel, *Albig. et cath.*, pp. 48, 49; Runciman, *Le manich. méd.*, p. 115 sqq.; Alphandéry, *op. cit.*, pp. 92-99; Borst, *op. cit.*, S. 95 sqq., S. 235 sqq.; Guiraud, *op. cit.*, t. I, p. 37

- sqq. ; Nelli, *Le phén. cath.*, p. 130 sqq. ; id., *La théorie de l'âme et de la liberté dans le catharisme occitan et lombard.* éd. id., *Spiritualité de l'hérésie*, p. 122 sqq. ; id. *Les textes cathares.* ibidem p. 142 sqq.
- (107) <Predicant et pro certo habent dominos duos esse sine principio et sine fine, unum penitus bonum et alterum penitus malum ; et dicunt quod unusquisque creavit angelos, bonus bonos, malus malos... > *Sommes des autorités.* p. 121 cit. in : Guiraud, *op. cit.*, t. I, p. 38, n. 1
- (108) <Heretici de Concoreco, qui habent heresim suam de Sclavonia et quidam alii de Bulgaria, credunt et predicant unum bonum Deum omnipotentem sine principio, qui creavit angelos et IVor elementa ; et dicunt quod Lucifer et complices sui peccaverunt in celis ; set unde processerunt eorum peccata dubitant.> *Somme contre les hérétiques.* p. 123, cit. in Guiraud, *op. cit.*, p. 38, n. 2, et p. 198, n. 2 — なほ、殆んど同一内容のものに、<Credunt et predicant tantum unum bonum Deum omnipotentem sine principio qui creavit angelos et IVor elementa. Et dicunt quod Lucifer et complices sui peccaverunt in caelis. Set unde processit peccatum illorum quidam illorum dubitant. Quidam vero dicunt sed archanum est — quod fuit quidam nequam spiritus habens IVor facies, unam hominis, aliam volucris, terciam piscis, quartam animalis, et fuit sine principio et manebat in hoc chaos, nullam habens potestatem creandi. Et dicunt quod Lucifer adhuc bonus descendit et videns speciem istius maligni spiritus seductus est.> *De heresi catharorum in Lombardia.* (Dondaine, *La hiérarchie cathare en Italie.* Rome. p. 281) cit. in : R. Nelli, *Théories de l'âme et de la liberté dans le catharisme occitan et lombard.* *Spiritualité de l'hérésie.* p. 135, n. 15
- (109) Borst, *op. cit.*, S. 345
- (110) イタリア・カタリ諸派の分離の具体的経過については、Borst, *op. cit.*, SS. 95-100
- (111) <Heretici qui habent errorem suum de Drugutia, qui dicuntur albigenses.> *Somme contre les hérétiques.* p. 123. cit. in : Guiraud, *op. cit.*, t. I, p. 200
- (112) <Erant alii heretici qui dicebant quod unus est creator, set habuit duos filios, Christum et Diabolum ; dicebant etiam isti omnes creaturas bonas fuisse, set per filias de quibus legitur in Apocalipsi omnia fuisse corrupta.> *Petri Vallium Sarnaii monachi Hystoria Albigensis* (éd. Guébin et Lyon). tome I, p. 12.

(昭和40年9月29日受理)